

# 住吉宮町遺跡群 I

## (坊ヶ塚遺跡)

—神戸市新交通3号線建設などに伴う埋蔵文化財調査報告—

1989.2

兵庫県教育委員会

# 住吉宮町遺跡群 I

## (坊ヶ塚遺跡)

—神戸市新交通3号線建設などに伴う埋蔵文化財調査報告—

1989.2

兵庫県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、神戸市東灘区住吉宮町・住吉東町に所在する「住吉宮町遺跡群」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査ならびに整理作業は、西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり実施した。調査は、昭和62・63年度の2年度に行い、本体工事の発注の関係で契約は3本になっている。遺跡は同一であるが、報告はそれに即して報告する。
3. 住吉宮町遺跡群では数次にわたって調査が行われており、同名の報告書が予想されることから「住吉宮町遺跡群！」とした。
4. 本報告にかかる遺跡については、当初「坊ヶ塚遺跡」として報告する予定であった。昭和60年度に調査された住吉宮町遺跡とは、調査の結果立地する微高地が異なり、遺跡単位としては別遺跡と考えられるからである。しかし、周知の遺跡として神戸市教育委員会発行の遺跡地図に「住吉宮町遺跡」として登載されていることから、遺跡名を遺跡群と変更した。それゆえ、今後「住吉宮町遺跡群坊ヶ塚遺跡」と呼称したい。現地説明会資料や展示会資料の「坊ヶ塚遺跡」とは同一遺跡であることを断っておき、混同のないよう注意戴くようお願いしたい。また、来年度刊行予定の第5次調査とも同一遺跡と考えられる。
5. 調査は、兵庫県教育委員会・社会教育・文化財課・技術職員 渡辺 昇・村上泰樹・山上 雅弘が担当した。
6. 本書で示す標高値は、神戸市設定のB.M.を使用した値で、方位は磁北である。
7. 造構写真ならびに遺物写真は調査員が撮影した。空中写真（図版1）は国土地理院撮影のものである。
8. 本書の執筆は第VI章を除いて渡辺が行い、編集は渡辺が担当した。第4表の須恵器観察表は石澤が作成した。
9. 須恵器の胎土分析を奈良教育大学三辻利一教授にお願いし、玉稿を戴いた。お礼を申し上げます。
- その須恵器胎土分析資料のうち、林山窯跡については採集者である福沢正弘氏から提供を受けた。快諾戴き、資料の提供を受けたことに謝意を表します。また、その仲介をお願いした神戸市教育委員会渡辺伸行氏にもお世話を戴いたことに感謝します。
10. 整理作業は、昭和63年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所で実施した。
11. 骨董については奈良国立文化財研究所 松井 章氏に鑑定をお願いし、コメントを戴いた。
12. 実測図の断面で器種を分けている。白抜きは弥生土器、土師器、黒塗りは須恵器、斜線は

瓦器、網目のトーンは陶磁器である。

13. 本報告にかかる出土遺物およびスライドなどの資料は、現在兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下650-1）で保管している。

14. 現地調査および整理調査に際し、多くの方々に、指導および助言を戴いた。明記して謝意を表する次第である。

（敬称略）

福沢正弘、奥田哲通、丹治康明、西岡誠司、松井 章、丸山 淳、  
三辻利一、安田博幸、渡辺伸行



第1図 住吉宮町遺跡群の位置

## 本文目次

I.はじめに .....	1
1. 調査に至る経緯	
2. 昭和62年度西工区の調査経過	
3. 昭和62年度中央工区の調査経過	
4. 昭和63年度の発掘調査経過	
5. 昭和63年度整理調査の経過	
II.位置と環境 .....	7
III.調査結果 .....	11
1. 西工区の調査結果	
2. 中央工区の調査結果	
3. 確認調査の結果（東工区の調査）	
4. 自由通路の調査結果	
IV.遺構 .....	23
(1) 弥生時代・古墳時代の遺構	
1. 周溝（墓）	
2. 古墳	
3. 土器棺墓	
4. 水田跡	
5. 弥生時代末～古墳時代の他の遺構	
(2) 中世の遺構	
V. 遺物 .....	31
(1)弥生土器	
(2)土師器	
(3)須恵器	
(4)中近世の遺物	
(5)獸骨	
VI.住吉宮町遺跡群出土須恵器の产地推定 .....	41
VII.おわりに .....	45

## 挿図目次

第1図 住吉宮町遺跡群の位置	
第2図 調査風景	3
第3図 調査地点図	4
第4図 調査風景	6
第5図 整理作業風景	6
第6図 坊ヶ塚遺跡古墳出土状態	7
第7図 住吉宮町遺跡の位置と周辺の遺跡	8
第8図 素大橋内古墳	9
第9図 本住吉神社	9
第10図 住吉宮町遺跡群調査地点図	10
第11図 P-1S 土層柱状図	11
第12図 P-2S 土層柱状図	12
第13図 調査風景	12
第14図 P-3S 土層柱状図	12
第15図 西工区調査地点図	13
第16図 P-4S 土層柱状図	13
第17図 P-5S 土層柱状図	14
第18図 P-1N 土層柱状図	14
第19図 P-2N 土層柱状図	15
第20図 P-3N 土層柱状図	15
第21図 P-4N 土層柱状図	16
第22図 P-5N 土層柱状図	16
第23図 P-6N 土層柱状図	17
第24図 中央工区調査地点図	17
第25図 P-7 土層柱状図	18
第26図 P-8 土層柱状図	18
第27図 P-9 土層柱状図	19
第28図 P-10 土層柱状図	19
第29図 P-15 土層柱状図	20
第30図 自由通路部分平面図	21

第31図	自由通路部分土層断面図	22
第32図	S X02 実測図	24
第33図	S X03 実測図	25
第34図	S X04 実測図	26
第35図	土器棺墓実測図	27
第36図	P-1S Na5 水田跡土層図	28
第37図	P-8 Na8 落ち込み・水田跡	29
第38図	P-8 Na9 溝状遺構	30
第39図	弥生土器実測図	32
第40図	土師器実測図(1)	34
第41図	土師器実測図(2)	34
第42図	土師器成形技法	35
第43図	須恵器実測図	36
第44図	須恵器拓影	38
第45図	瓦器・陶磁器実測図	39
第46図	池ノ下支群の須恵器のRb-Sr分布図	41
第47図	地元窯と大阪陶邑群の須恵器の相互識別	42
第48図	住吉宮町遺跡群出土須恵器のRb-Sr分布図	42
第49図	住吉宮町遺跡群出土須恵器の産地推定	43
第50図	住吉宮町遺跡群遠景	46

### 表 目 次

第1表	西工区調査工程表	2
第2表	中央工区調査工程表	3
第3表	住吉宮町遺跡群調査一覧	10
第4表	須恵器觀察表	37
第5表	住吉宮町遺跡群出土須恵器の分析結果	44

### 図 版 目 次

- 図版1 住吉宮町遺跡群周辺空中写真  
 図版2 (上) 住吉宮町遺跡群遠景 (北から)

- (下) 住吉宮町遺跡群遠景(南から)
- 図版3 (上) SX01周溝断面(P-3S)  
(下) 焼土壙(P-9)
- 図版4 (上) 土器棺墓(P-3N)  
(下) 土器棺墓(P-3N)
- 図版5 (上) 水田小畦畔(P-4S)  
(下) 水田小畦畔(P-8)
- 図版6 (上) SX03周溝(P-5N)  
(下) SX03土器出土状態
- 図版7 (上) SX04全景(東から、自由通路)  
(下) SX04全景(土器取り上げ後、北東から)
- 図版8 SX04土器出土状態(自由通路)
- 図版9 自由通路部分土層断面
- 図版10 (上) 落ち込み(P-8)  
(下) 落ち込み歯骨出土状態(P-8)
- 図版11 (上) 旧住吉駅基礎石垣(P-4N)  
(左下) 噴砂(P-7)  
(右下) 噴砂(P-8)
- 図版12 (上) P-15土層堆積状況  
(下) P-15土層堆積状況
- 図版13 (上) 弥生土器(甕・壺・鉢)  
(下) 弥生土器(鉢・高杯)
- 図版14 弥生土器・土師器
- 図版15 SX03出土須恵器
- 図版16 (上) 須恵器  
(下) 須恵器・土師器
- 図版17 (上) 中近世の土器  
(中左) 墓輪?  
(中右) 瓦器  
(下) 歯骨

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

住吉宮町遺跡は、昭和60年度に宅地開発に伴って確認された遺跡で、昭和60年度以降神戸市教育委員会によって調査が数地点で行われている。当初は、本住吉神社西方で遺跡が確認されていたが、その後神社東方においても遺跡の可能性が高いものと考えられ、昭和60年度刊行された「神戸市文化財分布図」に「東灘区No.39住吉宮町遺跡」として登載されており、周知の遺跡となっていることから、今回調査地区についても立会い調査が実施され、西側の地点で遺構面が確認されている。そのため、昭和62年度に調査を行うこととした。

新交通3号線は、ポートアイランドと三の宮駅を結ぶポートライナーに続く新交通システムで、六甲アイランドとJR住吉駅を結ぶ交通機関である。早い段階から構想はあったものの、実際の工事は昭和61年度から着手され始め現在に至っている。昭和63年4月段階では、住吉川右岸の一部を除いて基礎工事は終了しており、上部の工事を行っている。

昭和61年度神戸市教育委員会による立会い調査は、3カ所実施されており、東側では機械掘削の限度まで下がたが遺構面は確認されなかった。しかし、西側では(今回調査のP-1 S周辺)遺構面が確認されており、今回の調査に引き継がれている。また、ほぼ同時期に昭和61年度に同じく神戸市教育委員会による立会い調査で確認され、兵庫県教育委員会によって昭和61年度に確認調査が実施された第5次調査で、方形周溝墓などの遺構が検出されたことから、住吉駅周辺に遺跡が広がっている確率が高くなかった。

それらの状況を総合して、今回は新交通システムの橋脚基礎掘削部分を対象とする調査を実施した。本体工事が3区に分かれており、工法も異なるため個々に協議を重ねて調査を実施した。西工区は駅ホーム内5カ所と南側5カ所の計10カ所の78.8m<sup>2</sup>の調査で表土下5~6mを対象とし、その下層は立会い調査を行った。調査は、本体工法の進捗に合わせて行い、当初は夜間調査も予定されていた。昭和62年7月24日のP-1 Sの調査を始めとして、P-1 Nの調査を昭和62年10月28日終了するまでの計28日間実施した。

中央工区は、P-6~P-10の5カ所で橋脚の設計が異なっていることから、調査対象面積は個々に違っている。中央工区も本体工事の工事計画に即して行われ、第2表のように調査を行った。昭和62年11月7日にP-10から行い、順次継続していく予定であったが、P-6の工事計画(設計)が変更になったことから昭和62年12月1日にP-7の調査を終えた時点で中断し、P-6については昭和63年3月18日~3月26日の6日間に調査を行った。合計26日間(200.3m<sup>2</sup>)調査を行った。西工区に比べて調査面積が広いことから、調査方法も多少変わっており、人力

掘削土量が増えている。

東工区は、西・中央工区の深掘工ではなく、ベタ基礎で掘削の深さも5mに限られている。5m部分に上からの重力が掛かることから、それより以下の掘削は不可能なため、掘削は5mまでと限定されていた。先に調査が行われていたP-10の調査では、5.3m下に土壤化した層があり、造構面の可能性が求められ、その上は洪水堆積層であった。また、それ以前にP-15部分の確認調査を昭和62年8月18日に実施し、5mまでは洪水堆積層で造構面・包含層は認められなかったことから、調査を行はず本体工事の前に立会い調査を行うことで協議が一致した。その結果、P-11では地表下5.1mの部分で3~5cmの薄い黒色土が確認されたが、それ以降では認められなかった。東工区は、立会い調査とし発掘調査は実施していない。

昭和63年度は、新交通3号線・駅ビル建設などに伴う改築による自由通路建設部分の調査を実施した。昭和62年度西工区のP-1S周辺に相当する。

## 2. 昭和62年度西工区の調査経過

西工区は、JR東海道本線住吉駅下りホーム上に構築される新交通3号線住吉駅の基礎に相当する部分である。ホーム内に5カ所、その両側に5カ所の円形部分を調査した。調査面積は、P-2とP-3の2カ所は直径3.5mの9.95m<sup>2</sup>で、他の8カ所は直径3.0mの7.35m<sup>2</sup>である。調査面積には、掘削部分以外に掘削用の余掘を見込んでいる。

調査は、本体工事の進捗状況に合わせて実施した。当初は、駅ホーム内で列車過重の懸念ある

第1表 西工区調査工程表

ライナー番号	7月	8月	9月	10月
P-1S	24 3 ↔			
P-2S	24 3 ↔			
P-3S		26 31 ↔		
P-4S		26 32 ↔		
P-5S				23 28 ↔
P-1N				15 22 ↔
P-2N				8 14 ↔
P-3N			18 26 ↔	
P-4N			9 15 ↔	
P-5N			7 11 ↔	

部分の調査(概ねレール下3.5m)については夜間調査が予定されていたが、諸般の状況の変化から、原則的に夜間調査は実施しなかった。調査とは言え、ライナー内の調査で戸惑うことが多々あった。また、工事の必要性からモルタル注入などの作業も間にあって、本来の調査という観点からすれば、やや離れたものであったが、以下に記述するように調査成果が挙げられたことは、大きな事実であり、これからの市街地での埋蔵文化財行政の1例になろうかと思われる。

#### 調査の組織

調査は、発掘調査・整理作業ともに、西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。

調査事務 社会教育・文化財課

課長 北村幸久

文化財担当参事 森崎理一

課長補佐 築

埋蔵文化財調査係長 大村敬通

調査担当

主任 渡辺界

技術職員 山上雅弘

調査補助員 渡辺裕子

作業委託 ㈱三井建設



第2図 調査風景

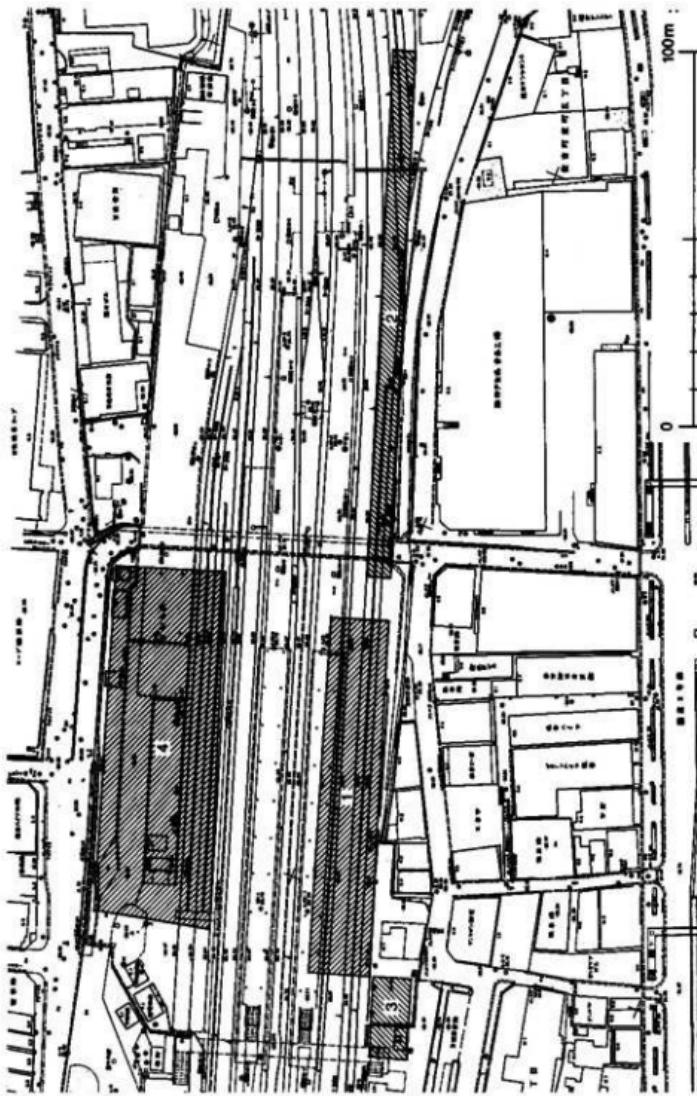
### 3. 昭和62年度中央工区の調査経過

中央工区はJR東海道本線住吉駅東側に位置し、新交通高架橋の基礎部分が対象地である。基礎は5カ所(P-6~10)であるが、設計が異なっているので、調査対象面積は個々に違っている。P-7・8は小判形を、他は円形を呈している。調査面積は、掘削の余掘部分を含めて、

第2表 中央工区調査工程表

ライナー番号	10月	11月	1月	2月	3月
P-6					19 26 ↔
P-7		16 21 ↔			
P-8		6 21 ↔			
P-9		11 21 ↔			
P-10	26 31 ↔				

1. 昭和12年度西工区 2. 昭和63年度中央工区 3. 昭和63年度自由通路調査区 4. 昭和21年度駅ビル調査区(第5次調査)



第3図 調査地点図

P-6が $23.74m^2$ 、P-7が $64.89m^2$ 、P-8が $79.89m^2$ 、P-9が $15.89m^2$ 、P-10が $15.89m^2$ を測る。深さは、基本的には地表下5~6mを対象とし、その下層については立会い調査を行った。

西工区に比べて調査面積が広いとはいえる、やはり限られた小面積であることに変わりはない。また、工事方法によるモルタル注入などの関係で調査日程も少なからず変化せざるを得なかつた。調査は、昭和62年11月7日にP-10の調査を始め、12月6日に一時中断し、P-6についてだけ昭和63年3月に調査を実施した。P-6は位置が当初予定と変わり、工法変更が行われたためで、それに伴う西工区との作業の組みから遅れたものである。

#### 調査担当

主 任 渡辺 畏  
作 業 委 託 阪新井組

#### 4. 昭和63年度の発掘調査経過

昭和63年度調査地区は、前年度調査を実施した西工区P-1Sの南接部分に相当する。事業名は、神戸市都市計画道路3・6・8号線建設に伴う自由通路敷設工事による調査である。昨年度調査の契機となったJR住吉駅ビル(坊ヶ塚遺跡)ならびに新交通3号線を核とした住吉駅周辺の整備事業の一環として計画されたものである。駅間やその界障口、駐車場への通路を自由通路と呼称している。今回調査部分は、その南側の界障口階段部分に当たる。併せて、階段南に付けられるエレベーター部分についても調査を実施する予定であったが、対象面積が狭く平面的な調査が不可能であることから、立会い調査として観察を行うこととした。今回調査地点は、神戸市遺跡地図の東灘区No.39住吉宮町遺跡の範囲内である。

調査対象地は遺跡範囲内であり、昨年度調査を実施した西工区P-1Sの南接部に当たることから、始めから全面調査を行った。

調査の方法は、調査面積が狭いことと排土置き場が設けられないことから、盛土ならびに上層については機械掘削をして搬出する予定であった。また、盛土部分(標高23.50m以上)については西日本旅客鉄道株式会社によって除去し、その下について発掘調査を実施する予定であった。しかし、機械掘削段階で調査地はまだ中央付近で現在も使用されている下水道が南北に通っていることが判明した。協議を行ったが、早急に付替工事が出来ないことから、調査方法の変更を余儀なくされた。そのため、下水道を中心に東西に分けて調査を行うこととし、便宜的に西地区・東地区と呼称することとする。それに伴い排土置き場が求められたことから、搬出せず東西に排土を置き替えて調査を実施した。

それによって、実際に調査を実施した調査面積も大きく減少した。中央の下水道部分だけでなく、法面を必要とすることから小面積となった。昨年度調査地区に比べると、調査面積は広いものの全面調査地点としては小面積である。当初工事対象地域の中に駅地下道や施設(便

所・浄化槽など)があつたことにより、遺構面は残存していなかつた。これら部分については調査着手段で機械掘削を行い遺構面が保存されていないことを確認した上で調査対象から除外した。調査面積は、上面で210m<sup>2</sup>を測るが、実際の調査を実施した面積は西区44m<sup>2</sup>、東地区12.5m<sup>2</sup>の56.5m<sup>2</sup>である。

調査は、昭和63年5月9日の機械掘削から始め、5月23日に管理引き継ぎを行つて調査を終了した。実際の作業は5月12・13日の2日間を東地区の、5月17~20日の4日間を西地区的調査に費やした。実作業は計6日間の調査であった。

調査事務　社会教育・文化財課

課長　中根孝司

文化財担当参事　森崎理一

課長補佐　兼

埋蔵文化財調査係長　大村敬通

調査担当

主任　渡辺 畏

技術職員　村上泰樹

作業委託　神林建設工業



第4図　調査風景

## 5. 昭和63年度整理調査の経過

昭和62年度調査資料については、一部現地において水洗い作業を行つたが、原則的には昭和63年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行つた。他の遺跡の整理作業と重複して平行して作業を進めていたが、遺物量が少ないとあって短期間に実施した。

調査事務　発掘調査と同じ

調査担当　主任　渡辺 畏

調査補助員　石澤真理子・伴 悅子・八木和子



第5図　整理作業風景

## II. 位置と環境

住吉宮町遺跡は、神戸市東灘区住吉宮町3・4丁目・住吉東町5丁目に広がる遺跡で、神戸市遺跡地図に東灘区No39として登載されている周知の遺跡である。今回調査を実施したのは、遺跡の東半一帯で住吉宮町4丁目・住吉東町5丁目にかけての旧国鉄敷地内である。官有地であったことから細かい住所表示はない。当地周辺は町名にもなっているように、本住吉神社(茨住吉神社)に代表されるように古くから文献に見られる早くから開発された地域である。和名抄には摂津国菟原都住吉郷と記されている。

当遺跡は、六甲山麓の住吉川右(西)岸に位置し、常に住吉川・石屋川の氾濫を受けていたことは想像に難くない。それら地形の問題や地理的環境については、ほぼ同じ時期に調査を実施した第5次調査「坊ヶ塚遺跡」に詳述する予定であるので割愛する。

周辺で最初に生活を始めるのは、芦屋市朝日ヶ丘遺跡である。旧石器時代の所産であるナイフ型石器をはじめ多数の石器を出土している。また、朝日ヶ丘遺跡近くの岩ヶ平遺跡や西宮市老松1号墳からもナイフ型石器が採集されている。縄文時代になても旧石器時代の遺跡では生活を継続しており、それに加えて芦屋市山芦屋遺跡でも前期の遺物が出土しており、丘陵部から山麓部へ遺跡が広がっていったことが理解されよう。神戸市域では、灘区滝ノ奥遺跡から有舌尖頭器が出土している。伯母野山遺跡や篠原遺跡でも縄文時代の遺物が出土しているが、芦屋市の遺跡に比べると時期の下るもので、前期・中期に遡る遺物は出土していない。ただ、篠原遺跡の注口土器や土偶は注目される。後期以降の遺跡は丘陵上・山麓に限らず、扇状地などの平地部でも生活を開始する。東灘区本庄町遺跡や井戸田遺跡などが、それに該当する。晩期になると、さらに本山遺跡・森北町遺跡など遺跡数が徐々に増加していく。

弥生時代になると遺跡数はさらに増加する。今まで、芦屋市金下山遺跡・城山遺跡、神戸市東灘区保久良山遺跡・荒神山遺跡・伯母野山遺跡などの高地性集落と桜ヶ丘・森・満ヶ森の銅鐸が良く知られていたが、最近の調査で扇状地から沖積地にかけての遺跡が多数知られるようになった。前期の遺跡としては、東灘区北青木遺跡が挙げられる。前期の単純遺跡で東の上の島遺跡、西の吉田遺跡と比べられる弥生時代の開拓ムラと考えられている。中期から後期と時代が下にしたがって遺跡数も増加している。高地性集落が後期になても継続しているのが、

当地周辺の特徴である。最近の調査では、森北 第8図 坊ヶ塚遺跡古墳遺物出土状態





- |           |            |           |             |
|-----------|------------|-----------|-------------|
| 1. 坊ヶ塚遺跡  | 2. 坊ヶ塚古墳   | 3. 住吉宮町遺跡 | 4. 郡家遺跡     |
| 5. 处女塚古墳  | 6. 東求女塚古墳  | 7. 本山遺跡   | 8. 扇保曾塚古墳   |
| 9. 岡本遺跡   | 10. 岡本梅林古墳 | 11. 保久良神社 | 12. 金鳥山遺跡   |
| 13. 荒神山遺跡 | 14. 赤堀山遺跡  | 15. 渕ヶ森遺跡 | 16. 鴨子ヶ原古墳群 |

第7図 住吉宮町遺跡の位置と周辺の遺跡

町道跡の中期後半の溝から出土した前漢鏡が注目されている。北西1.5kmに位置する郡家道跡では竪穴住居跡と円形周溝墓が検出されている。深江北町道跡でも多数の円形周溝墓群が調査されており、今後畠状地の道跡が増加することは想像に難くない。

前期の古墳は、旧海岸線付近と山麓地形変換線付近の両者で見られる。旧海岸線付近の前期古墳は、万葉集の菟原處女の悲恋伝説で有名な處女塚・東求女塚・西求女塚である。ただ、同一時期ではなく明らかな時期差が認められる。處女塚古墳は前方後方墳という特殊な彫影をしている。山麓地形変換線付近の古墳は東灘区内では福保曾塚古墳が知られているだけであるが、兵庫区・須磨区や西宮市などに同様の立地条件の古墳が存在する。かつて存在したと伝えられている住吉宮町道跡群北方の坊ヶ塚古墳も同じ時期の古墳と思われる。また、郡家道跡や坊ヶ塚道跡では前期の住居跡が確認されている。中期の古墳は芦屋市親王塚古墳・金津山古墳や垂水区には立地しているが、間の平野部では確認されていない。住吉宮町道跡群の古墳はそれらに続く時代の古墳である。今のところ、西摺では同じ時期まで遡る横穴式石室は知られておらず横穴式石室採用前の古墳と考えられる。後期の古墳は多数構築されたにもかかわらず、東灘区内では神戸菟大橋内古墳（生駒古墳）しか残存していない。鴨子ヶ原や岡本梅林・八幡谷に横穴式石室を主体部とする古墳が存在していた。芦屋・西宮市域の六甲山麓には八十塚古墳群が比較的良く旧態を保っているが、徐々に減少しつつある。

奈良時代には当道跡近くを山陽道が通っており、北西に存在する郡家道跡が菟原郡衙ではないかと考えられる。住吉宮町道跡群でも少量ながら奈良時代の遺物が出土している。断続的ながら鎌倉時代までは道跡は繼續しているようである。周辺の道跡も同様で現在に至るまで連続と生活を営んだであろうが、明瞭な道構は確認されていない。



第8図 案大橋内古墳



第9図 本住吉神社

第3表 住吉宮町遺跡群調査一覧

次数	年次	所在地	調査主体	主な遺構
1	60	住吉宮町7丁目	市教育委員会	古墳3基
2	60	住吉宮町7丁目	市教育委員会	古墳8基
3	60	住吉宮町3丁目	市教育委員会	旧河道・土塁
4	61	住吉宮町7丁目	市教育委員会	箱式石棺3基
5	61・62	住吉本町1丁目	県教育委員会	古墳14基・方形周溝墓3基 他
6	62	住吉宮町6丁目	県教育委員会	溝・土塁
7	62	住吉宮町4丁目	県教育委員会	古墳1基・土器棺・水田跡 他
8	62	住吉宮町7丁目	市教育委員会	中世ピット
9	63	住吉東町4丁目	市教育委員会	古墳・住居跡・掘立柱建物 他
10	63	住吉宮町4丁目	県教育委員会	古墳1基
11	63	住吉宮町6丁目	市教育委員会	掘立柱建物跡・土塁 他



第18図 住吉宮町遺跡群調査地点図

### III. 調査結果

#### 1. 西工区の調査結果

##### ① P-1 Sの調査結果

地表下(盛土上面)約6mの調査の結果、造構面10面と旧表土面2面を確認した。旧表土面は他の造構に比べて土壤化の割合が低く、暗茶褐色を呈している。土層下に植物の根の痕跡が認められることから、樹草地と考えられる。

ライナー番号

住吉駅ビルに伴う発掘調査でも弥生時代の水

1

田面の下で樹草地面を確認していることから、24.20m

2

同種の面と思われる。

造構面10面を上層から見てみると、近世・近代の水田面2面、中世の生活面2面、中世～古代の水田面2面、弥生時代末～古墳時代の生活面(埋葬面)2面、弥生時代の水田面2面となる。調査面積が約7.2m<sup>2</sup>と狭いことから明瞭な造構は、ほとんど確認されず造構面を検出したにすぎない。中世の生活面でピット2基と、弥生時代の水田面で小畦畔を確認しているだけであるが、前記住吉駅ビルに伴う発掘調査成果を参考にし、比較対象して考えてみると大きく変化はないものと思われる。水田は、上層の2面は朱里型の、下層の2面は不定形小区画の水田と思われる。

##### ② P-2 Sの調査結果

地表下(盛土上面)約6mの調査の結果、P-1 Sと基本的に同じであるが、地形が下がっており、造構面の数が減少している。造構面6面と旧表土面3面を確認した。旧表土面は他の造構面に比べて土壤化の割合が低く、暗茶褐色を呈している。土層下に植物の根の痕跡が認められることから、P-1 Sと同じく樹草地と考えられる。

造構面6面を上層から見てみると、近世・近代の水田面2面、中世の生活面2面、弥生時代末～古墳時代の生活面(埋葬面)2面となる。調査面積が約7.2m<sup>2</sup>と狭いことから明瞭な造構は、ほとんど確認されず造構面を検出したにすぎない。自然地形の落ち込みなどを確認してい

第11図 P-1 S 土層柱状図



る。前記住吉駅ビルに伴う発掘調査結果を参考にし、比較対象して考えてみると大きく変化ないものと思われる。

### ③ P-3S の調査結果

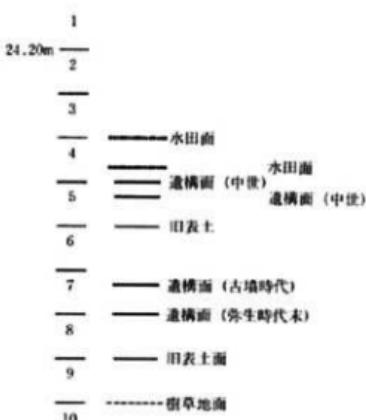
地表下（盛土上面）約 6 m の調査の結果、遺構面 6 面と旧表土面 1 面を確認した。旧表土面は他の遺構面に比べて土壤化的割合が低く、暗茶褐色を呈している。植物の根の痕跡が認められ、樹草地と考えられる。

遺構面 6 面を上層から見てみると、近世～古墳時代初頭の水田面 2 面、弥生時代末の生活面（埋葬面）2 面、弥生時代の水田面 2 面となる。調査面積が約 7.2m<sup>2</sup> と狭いことから明瞭な遺構は、ほとんど確認されず遺構面を検出したにすぎない。弥生時代末の生活面（埋葬面）では、溝状の落ち込みを検出しておらず、方形周溝墓の溝の可能性が高い。溝内の埋土である黒褐色土から弥生時代末の土器片が数点出土している。中には、甕と器種の判別する土器も含まれている。断面の観察から東側の方が高いので、方形周溝墓の西側の溝を検出したものと考えられる。水田は、上層の 2 面は条里型の、下層の 2 面は不定形小区画の水田と思われる。下層上面の水田（弥生時代）では、小畦畔を確認している。



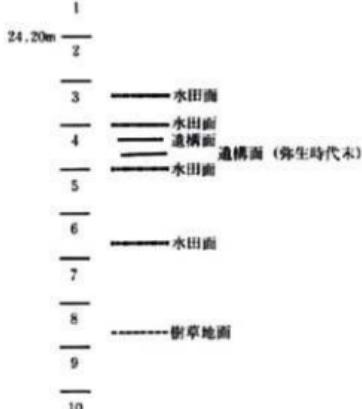
第 13 図 調査風景

ライナー番号

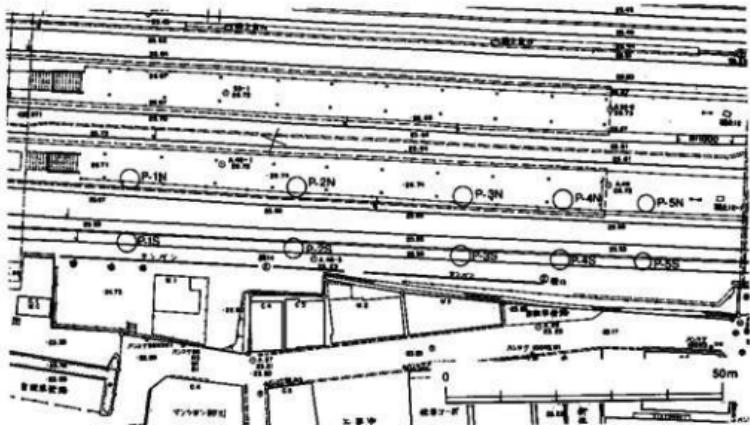


第 12 図 P-2S 土層柱状図

ライナー番号



第 14 図 P-3S 土層柱状図



第15図 西工区調査地点図

#### ④ P-4 Sの調査結果

地表下(盛土上面)約6mの調査の結果、P-3 Sと基本的に同じであるが、地形が下がっており、遺構面の数が減少している。遺構面4面と旧表土面2面を確認した。旧表土面は他の遺構面に比べて土壤化の割合が低く、暗茶褐色を呈している。下層の旧表土面は土層下に植物の根の痕跡が認められることから、P-1 Sなどと同じく樹草地と考えられる。

遺構面4面を上層から見てみると、近世～古墳時代の時期不明の水田面1面、弥生時代末～古墳時代の生活面(埋葬面)2面、弥生時代の水田面1面となる。調査面積が約7.2m<sup>2</sup>と狭いことから、明瞭な遺構はほとんど確認されず遺構面を検出したにすぎない。P-1 Sに比べると地形が高くなっている、遺構面や土石流も標高の高いところで、確認している。

#### ライナー番号

1	
2	24.20m
3	—— 水田面
4	—— 遺構面(古墳時代?)
5	—— 遺構面(弥生時代末～古墳時代)
6	—— 旧表土面
7	—— 水田面
8	----- 樹草地面
9	
10	

第16図 P-4 S 土層柱状図

### ⑤ P-5 S の調査結果

地表下（盛土上面）約6mの調査の結果、P-4 S と基本的に同じであるが、地形が上がり、土壤化した堆積土が厚くなっている。遺構面5面と旧表土面1面を確認した。旧表土面は他の遺構面に比べて土壤化の割合が低く、P-1 Sなどと同じく樹草地と考えられる。

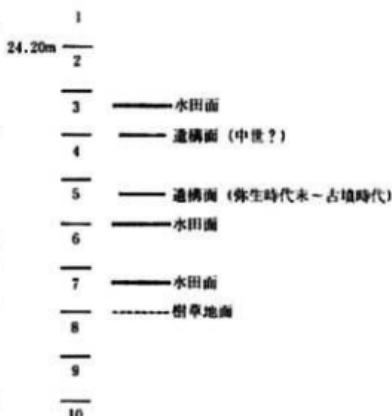
遺構面5面を上層から見てみると、近代～中世の時期不明の水田面1面、中世の生活面1面、弥生時代末～古墳時代の生活面（埋葬面）1面、弥生時代の水田面2面となる。明瞭な遺構は、ほとんど確認されず遺構面を検出したにすぎない。P-4 S に比べると地形が高くなっている。遺構面や土石流も標高の高いところで、確認している。ライナーのNo.8で土石流が落ち込む部分を確認している。

### ⑥ P-1 N の調査結果

地表下（盛土上面）約5mの調査の結果、P-1 S と基本的に同じであるが、遺構面の数は減少している。遺構面4面と旧表土面1面を確認した。旧表土面は他の遺構面に比べて土壤化の割合が低く、P-1 Sなどと同じく樹草地と考えられる。

遺構面4面を上層から見てみると、近世～中世の時期不明の水田面2面、弥生時代～古墳時代の生活面（埋葬面）2面となる。P-1 N と比べると地形（土石流）が高くなっているが、遺構面はやや低くなっている。弥生時代の水田面はP-1 Nでは確認されなかった。No.6の遺構面は北東部分のみ2層になっている。しかし、遺物は小片しか出土していない。

ライナー番号



第17図 P-5 S 土層柱状図

ライナー番号



第18図 P-1 N 土層柱状図

### ⑦ P-2 Nの調査結果

地表下(盛土上面)約5.5mの調査の結果、P-1 Nと基本的に同じであるが、遺構面の数は減少している。遺構面3面と旧表土面2面を確認した。旧表土面は他の遺構面に比べて土壤化の割合が低く、黒灰色を呈している。P-1 Sなどと同じく樹草地と考えられる。

遺構面3面を上層から見てみると、近世～中世の時期不明の水田面1面、弥生時代～古墳時代の生活面(埋葬面)1面、弥生時代の水田面1面となる。P-1 Nと比べると地形の変化が見られる。遺構面はやや高くなっているが、上石流は低くなっている。ライナー内で地形の変化がみられ、旧表土面は西から東へ落ち込んでいる。

### ⑧ P-3 Nの調査結果

地表下(盛土上面)約5mの調査の結果、P-2 Nと基本的に同じであるが、遺構面の数は増加している。遺構面4面と旧表土面2面を確認した。旧表土面は他の遺構面に比べて土壤化の割合が低く、樹草地と考えられる。

遺構面4面を上層から見てみると、近世～中世の時期不明の水田面2面、弥生時代～古墳時代の生活面(埋葬面)2面となる。P-4 Nと比べると地形が僅かに高くなっている。遺構面や土石流も標高がやや高くなっている。弥生時代の水田面はP-4 Nでは認められたが、P-3 Nでは確認されなかった。No.4の遺構面では古墳時代前半の土器棺蓋を確認した。土師器蓋の口縁部を欠いた調節部を棺身にし、口縁部を棺身を支える台に使用している。

ライナー番号

1	
24.20m	—
2	— 水田面
3	— 遺構面
4	—
5	— 水田面
6	— 旧表土面
7	—
8	— 旧表土面
9	— 树草地面
10	—
11	—
—	—

第19図 P-2N 土層柱状図

ライナー番号

1	
24.20m	—
2	— 水田面
3	— 水田面
4	— 遺構面
5	— 旧表土面
6	— 遺構面
7	—
8	— 旧表土面
9	— 树草地面
10	—

第20図 P-3N 土層柱状図

### ⑨ P-4 Nの調査結果

地表下（盛土上面）約5mの調査の結果、P-5 Nと基本的に同じであるが、遺構面の数が増加している。遺構面5面と旧表土面3面を確認した。最下層の旧表土面は植物の根の痕跡が認められ樹草地と考えられる。

遺構面5面を上層から見てみると、近世～中世の時期不明の水田面2面、古墳時代後期（6世紀前半）～弥生時代末の生活面（埋葬面）2面、弥生時代の水田面1面となる。ライナー番号No.3の北半分で旧駄倉の基礎である石垣を検出している。P-5 Nに比べると地形が低くなっている、遺構面や土石流も標高のやや低いところで確認している。また、P-5 Nと比べて遺構面はほぼ水平であるが、下層の遺構面は下がっている。

### ⑩ P-5 Nの調査結果

地表下（盛土上面）約5mの調査の結果、P-4 Sと基本的に同じであるが、遺構面の数が減少している。遺構面3面と旧表土面2面を確認した。下層の旧表土面は樹草地と考えられる。

遺構面3面を上層から見てみると、近世～中世の時期不明の水田面1面、中世の生活面1面、古墳時代後期（6世紀前半）の生活面（埋葬面）1面となる。調査面積が約7.2m<sup>2</sup>と狭いにもかかわらず、古墳時代後期（6世紀前半）の生活面で古墳の周溝を確認した。溝内から6個体の須恵器が出土している。P-1 Sに比べると地形が高くなっている、遺構面や土石流も標高の高いところで、確認している。また、P-4 Sと比べて中世の遺構面はほぼ水平であるが、6世紀前半の遺構面は

ライナー番号

1	
24.20m	—
2	—— 水田面
3	—— 水田面
4	—— 旧表土面 —— 遺構面
5	—— 遺構面
6	—— 水田面
7	—— 旧表土面
8	—— 樹草地面
9	
10	

第21図 P-4N 土層柱状図

ライナー番号

1	
24.20m	—
2	
3	—— 水田面
4	—— 遺構面
5	—— 遺構面（古墳時代 6世紀前半）
6	—— 旧表土面
7	—— 樹草地面
8	
9	
10	

第22図 P-5N 土層柱状図

下がっている。

## 2. 中央工区の調査結果

### ① P-6 の調査結果

地表下（盛土上面）約 5 m の調査の結果、  
洪沢砂を中心とした堆積状態であることは新  
交通住吉西工事区（P-1～5）と同じであ  
る。遺構面 4 面と旧表土面 1 面を確認した。  
旧表土面は他の遺構面に比べて土壤化の割合  
が低く、黒灰色を呈している。

遺構面 4 面を上層から見てみると、近世  
～中世の時期不明の水田面 1 面、中世の生活  
面 1 面、弥生時代末～古墳時代後期（6 世紀  
前半）の生活面（埋葬面）2 面となる。調査  
面積が約 23.7m<sup>2</sup> と西工事区に比べてやや広  
いながらも明らかな遺構は検出されなかった。

No. 7 部分で幅 1.35m、深さ 0.35m の浅い溝状の落ち込みを調査しており、方形周溝墓の可能性  
も考えられる。弥生時代末の壺が 1 個出土している。P-5 の調査結果と似た状況で、土石流も  
標高の高い所で確認している。同一層で北から南へ約 0 ～ 1 m 下がっており、地形の変化点で  
あることが判る。

ライナーノ番号	
1	
2	24.80m
3	
4	—— 水田面
5	—— 遺構面
6	—— 遺構面
7	—— 遺構面
8	—— 旧表土面
9	
10	

第 23 図 P-6 土 層 柱 状 図



第 24 図 中央工区調査地点図

## ② P-7 の調査結果

地表下（盛土上面）約6mの調査の結果、基本的にP-6と同じであるが、造構面の数は減少している。造構面2面と旧表土面2面を確認した。旧表土面は他の造構面に比べて土壤化の割合が低く、黒灰色を呈している。下層の旧表土面は土層下に植物の根の痕跡が認められることから、樹草地と考えられる。上層の表土面は現代の面である。

造構面2面を上層から見てみると、中世前後の時期不明の水田面1面、古墳時代後期（6世紀前半）～弥生時代末の生活面（埋葬面）1面となる。調査面積が約64.89m<sup>2</sup>と広面積であることからも、調査対象地内で地形の変化が見られる。No.7・No.8底面において、特にそれが顕著である。原則的に北西から南東方向に落ち込んでおり、小さな谷地形の地形変換線上に位置していることが推定される。

## ③ P-8 の調査結果

地表下（盛土上面）約6mの調査の結果、P-7やP-9と比べて安定した部分で、造構面の数が増加している。造構面5面と旧表土面4面を確認した。旧表土面は他の造構面に比べて土壤化の割合が低く、黒灰色を呈している。最下層の旧表土面は土層下に植物の根の痕跡が認められることから、P-1Sと同じく樹草地と考えられる。

造構面4面を上層から見てみると、中世前後の時期不明の水田面2面、弥生時代～古墳時代の生活面（埋葬面）1面、弥生時代の水田面2面となる。No.5より上層は、洪水堆積土が多く堆積している。造構面もやや標高が低くなっているが、No.5から下層は安定している。造構は、No.8で落ち込みを、No.9で溝状造構を、確認したが明瞭な造構は確認されなかった。溝状造構は幅2m、深さ0.4mを測り、北東から南西へ流れている。No.8の水田面では小畦畔を確認している。出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器の他に種別は不明だが、獸骨を出土している。



第25図 P-7 土層柱状図



第26図 P-8 土層柱状図

#### ④ P-9の調査結果

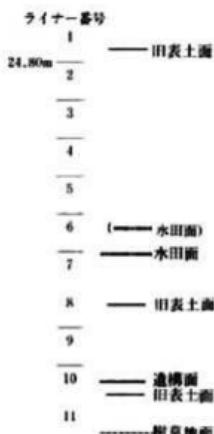
地表下(盛土上面)約6.5mの調査の結果、P-8と基本的に同じであるが、地形的には下がっている。造構面3面と旧表土面4面を確認した。旧表土面は他の造構面に比べて土壤化の割合が低く、黒灰色～茶褐色を呈している。最下層の旧表土面の土層下に植物の根の痕跡が認められるところから、樹草地と考えられる。

造構面3面を上層から見てみると、近世～中世の時期不明の水田面2面(1面は全体に広がっていない)、弥生時代～古墳時代の生活面(埋葬面)1面となる。造構面は標高の低い部分で確認しているが、層としては厚く堆積しており、長期間にわたって安定していたことが窺われる。土石流はやや低くなっている。

#### ⑤ P-10の調査結果

地表下(盛土上面)約6mの調査の結果、他の地点に比べると洪水堆積物が非常に厚い部分であることが判明した。造構面2面と旧表土面1面を確認した。旧表土面はP-1Sなどと同じく樹草地と考えられる。

造構面2面を上層から見てみると、近世～中世の時期不明の水田面1面、弥生時代～古墳時代の生活面(埋葬面)1面となる。P-9に比べると地形(土石流)はさらに低くなってしまっており、造構面の東端に相当するものと思われる。東側のP-11でも20.40mのところで、厚さ数cmの土壤化した黒褐色土が堆積しているだけであった。造構の存在しない谷部分に近い地点と考えられる。出土遺物は、6世紀前半の須恵器が出土している。



第27図 P-9 土層柱状図



第28図 P-10 土層柱状図

### 3. 確認調査の結果（東工区の調査）

工法によって調査方法の制約を受け、当初の協議で造構面は調査対象地域内には存在しないと考えられる地区である。

#### ① P-11～P-14の調査結果

P11～P14については、基礎工事の進捗に合わせて立会い調査を行った。その結果、P11で薄い土壤化層を確認したが、造構の存在の可能性は薄い。他では土壤化層も確認されていない。

#### ② P-15の調査結果

調査期間 昭和62年8月18日

調査面積 上面 46.75m<sup>2</sup>

下面（6m下） 7m<sup>2</sup>

ベタ基礎となるP-11～P-16部分については、神戸市教育委員会によって立会い調査が実施され、造構・包含層など確認されなかった。その際、本体工事のときに再度立会い調査を実施することになっていた。また、住吉宮町遺跡の発掘調査の打ち合せにおいても遺跡の範囲内外かの問題が提起され、確認調査を実施することとなった。

調査は、基礎を入れる6mまでを対象とした。それ以下を削除すると本体の過重の問題から不安定になる恐れが生じるため、調査は行っていない。調査は、重機（0.7バックホー）を使用して行った。砂礫層で崩壊する可能性があるので、安全面から45度の勾配を付けて掘り下げた。そのため、上面と下面で面積が異なっている。

調査の結果、6mまでの部分では造構・包含層は確認されず、全て洪水による堆積物である。ただ、土石流が確認され、その堆積方法は北西から南東にかけてのもので住吉川からの直接的な堆積物でないことが明らかになった。6m以下に造構の存在する可能性は少ないものと思われるが、全く可能性がないというわけではない。



第29図 P-15 土層柱状図

#### 4. 自由通路の調査結果

東地区は上面では南北10m、東西7mの70m<sup>2</sup>を測ったが、調査終了段階の面では南北5m、東西2.5mの12.5m<sup>2</sup>を測る調査区域である。

造構面は3面確認している。上から中世・古墳時代後期（6世紀初頭）・弥生時代末の3面である。弥生時代末の面は土壤化が古墳時代の面と比べて余り進んでおらず、生活面として利用したかどうかは不明である。その間の堆積土は洪水堆積物である。造構面上層に各々の時代の薄い包含層が存在していた。

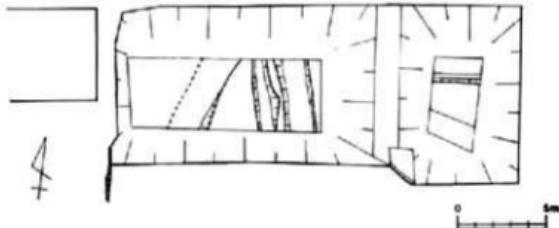
造構面としては存在するが明瞭な造構は検出されなかった。ただ、古墳時代の造構面に溝状の造構を検出しているが、自然の地形変化の可能性が高いものと考えている。

出土遺物は、弥生土器が最も多く、須恵器や土師器を少量出土している。

西地区は上面では南北8.5m、東西15mの127.5m<sup>2</sup>を測ったが、調査終了段階の面では南北4m、東西11mの44m<sup>2</sup>を測る調査区域である。

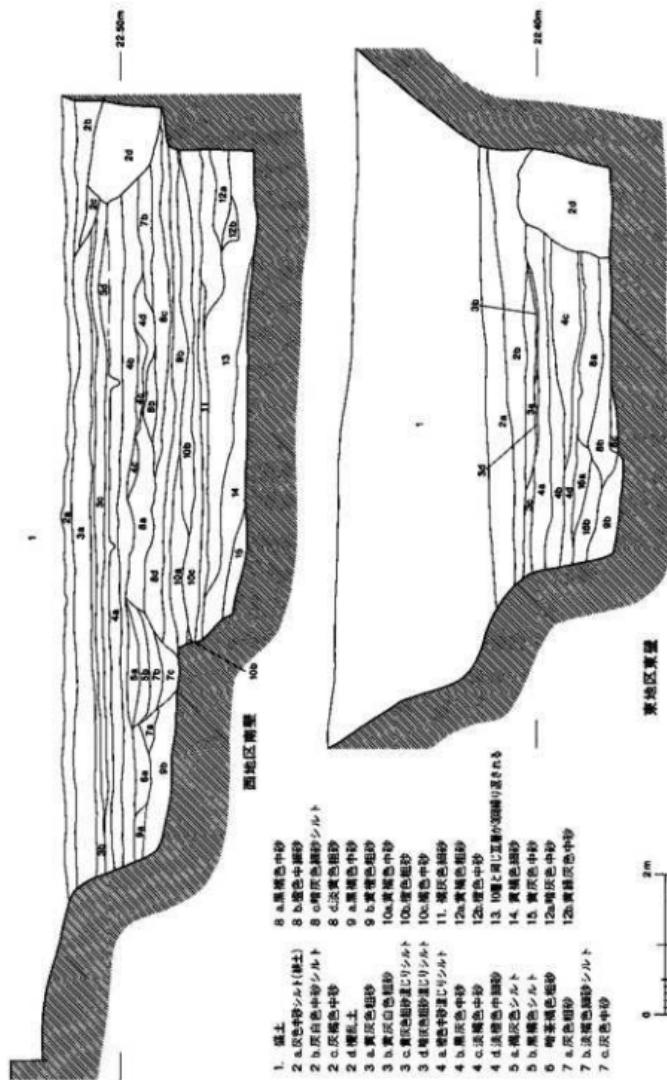
造構面は、東地区と同様に3面確認しているが、最下層の弥生時代末の面は生活したかどうか明らかでない。造構面の時期も東地区と同じで、中世面は2面に分けることも可能かとも考えられたが、造構が明瞭でないことから1面としておく。不定形のピットを2基確認しているが、埋土が新しい様相を示している。造構として捉えるには不安がある。弥生時代末の面の下層でも数箇所土壤化の弱い面があるが、造構は存在しなかったものと思われる。

古墳時代後期の面では溝状造構を3条検出している。やや上の面から彫かれている2条の溝状造構（SD02・03）は肩部の土や堆積状況などから自然地形の可能性が高いと思われる。調査中央やや東側で確認した溝状造構（SD04）は暗茶褐色土を肩とするしっかりした溝である。幅1.3～1.6mを測る溝で主軸方向を南北よりやや西に振っている。調査区内を南北に貫通しており、全体にわたって遺物が出土している。溝の底には付いており、遺物は須恵器に限られる。



第30図 自由通路部分平面図

第31図 自由道路部分土層断面図



## IV. 遺構

### (1)弥生時代・古墳時代の遺構

#### 1. 周溝（墓）

調査面積が狭いため、断定出来る資料ではないが、第5次調査（坊ヶ塚遺跡）などの例を考慮すれば、周溝墓の溝と考えて良い資料と思われる。P-3SとP-6の2ヵ所で溝を確認している。

7.2m<sup>2</sup>という小面積の調査であることから、溝の平面形態を推定することは困難である。そのため、ただ単に周溝墓として報告する。溝として報告するのが、正しい方法であろうと思われる。しかし、上記の理由から周溝墓の可能性が高いものと考えるので、周溝墓の意味を含めて周溝として報告する。

##### ①SX01（周溝1）

P-3Sで検出した遺構で、5段目のライナーで確認している。遺構面の標高は、22.50m前後である。溝は、北西方向から南東方向へ延びている。調査区の南西部で検出しているだけで、残存長は1.8mを測るだけである。現状では溝は直線的に延びている。西側の断面で得られた数値は、幅1.5m、深さ0.15mを測る。埋土は、黒褐色の中砂でやや粘性を有する。北東側の肩部がやや高いことから、決定的な資料ではないが、北東側が周溝の内側にならうかと思われる。

出土遺物は、少量であるが弥生土器が出土している。

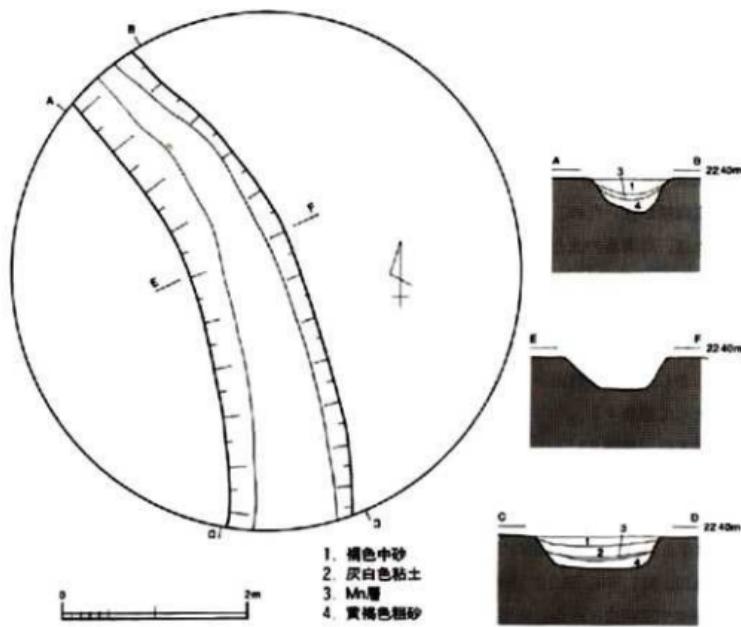
##### ②SX02（周溝2）

P-6で確認した遺構で7段目で検出されている。遺構面の標高は、22.20m前後である。溝は、北西方向から弧状に這って、南西方向へ続いている。調査部分だけでは、円形のように思われるが、明らかではない。幅は北側が狭く0.85mで、南側はやや広くなり1.35mを測る。深さは、逆に北側が深くなっているが、標高で見るとほぼ同一高である。深さは0.30~0.35mを測る。周溝1の埋土は1層であるが、周溝2は3~4層に分層出来る。土壤化は進んでおらず、暗茶褐色粗砂を底の層とし、マンガン層・（灰白粘土）・褐色中砂となっている。

出土遺物は、少量であるが弥生土器が出土している。壺が1個体出土しているが、復原は出来なかった。

#### 2. 古墳

第5次調査（坊ヶ塚遺跡）でも墳丘は削平されて残っていなかったが、今調査でも同様であ



第32図 SX82 実測図

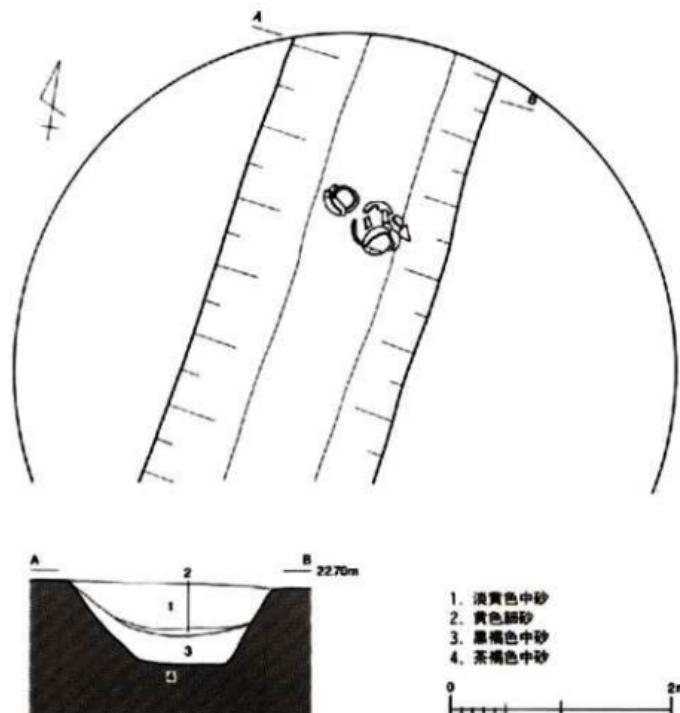
った。そのため、削平部分が多いことから、古墳の確認出来る確率は低いものである。15ヶ所の調査の結果、明らかなものはP-5Nで確認した遺構だけである。

昭和63年度の自由通路に伴う調査で溝を確認しており、古墳の周溝と考えられる。調査面積は狭いながらもある程度面的な調査を行えば、確認される確率が高いことを示している。同様に広面積を調査すれば、古墳などが確認される可能性がより高いものと思われる。

#### ①SX03(古墳)

P-5Nの5段目のライナーで確認している。遺構面の標高は、22.40m前後である。溝は南北に直線的に延びている。溝の幅は0.95m、深さ0.3~0.45mを測る。溝の断面は、西側に比べると、東側がやや緩やかである。淡褐色中砂を肩・底の土とし、埋土は底から茶褐色中砂・黒褐色中砂・淡黄色中砂となっている。埋土が土壤化した土だけでなく、上層に洪水堆積土が溜まっていることも第5次調査と同様である。残存長は、ライナー内の3.3m確認している。肩部は西側の方が高くなっていることから、古墳の東側の溝の可能性が高いものと思われる。

出土遺物は、溝内から弥生土器の小片が数点出土している以外は須恵器に限られる。溝内の

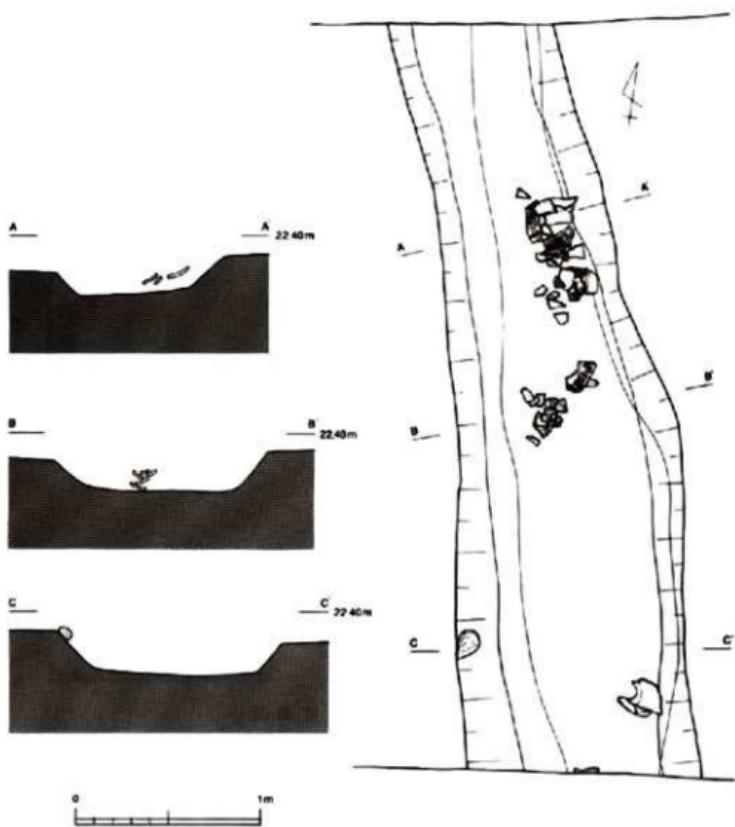


第33図 SX03 実測図

底に接さずに須恵器杯のセットが3組と杯身1点の7点が出土している。2組は正位置で蓋をした状態で出土しており、上下に重なっていた。他の1組は高い位置にある1組と並んで出土しており、身が上になる逆位置を示していた。下になっていた杯身・蓋のセットの底が黒褐色土のはば底に近い位置を占めている。杯のセットは焼成の違いなどから明白であり、焼成時からセットとしていたものと思われる。各セットとも土器の径・器高が異なってくる。杯身1点のみ僅かに離れて出土している。他に数点の須恵器破片が黒褐色土中から出土している。焼成の甘い破片が多いのが特徴であろう。

#### ②SX04 (古墳)

昭和63年度自由通路部分の調査で確認している。古墳東側の溝だけを検出している。ほぼ南北に調査区内を貫いている。部分的に幅を広げているところもあるが、平均的数値は1.4mを測



第34図 SX84 実測図

る。最大幅は調査区南側で1.45mあり、最小幅は1.3mを測る。深さは0.45~0.55mを測り、埋土は黒褐色中砂である。溝の断面形状は東側の方がやや急な緩いU字形を呈している。主軸はN6°Wとほぼ南北方位を探っている。

溝底全体にわたって遺物が出土している。底面に付いて、須恵器が出土している。器種は變に限られている。中型の甕2個体が破砕されて出土している。口縁部を下に向けて出土してい

る部分は原位置かと思われる。破碎された部分を示すものと思われる。

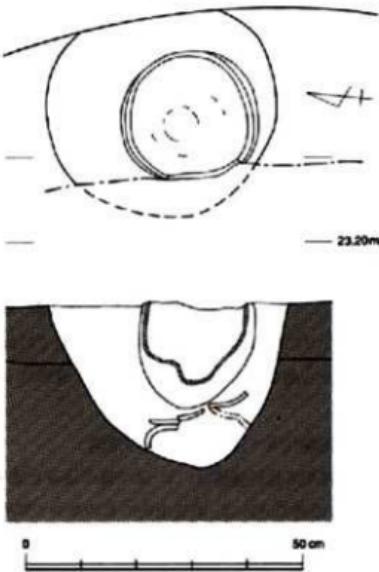
西側溝については駅施設などすでに破壊されて、残存していないことが判明しているが、土壤化した黒色土の状況から墳丘部分が洪水で流失した可能性高く、古墳の東溝と考えることが可能である。土壤化した層が東側にはついているが、西側では確認されないことから、少なくとも同一時期の土壤化層は高くなっていたことが明らかである。第5次調査例や堆積状況・遺物出土状態から考えて、古墳と考えて大過ないものと思われる。

遺物出土状態は、須恵器甕が破碎された状態で出土している。最大1.4m離れた土器片が接合されている。甕2個体が出土しており、口縁部の位置を埋葬（副葬）時の原位置と考えるなら、葬送時の一資料を加えたことになろう。今回の調査だけではこの間が墓道であるなどの資料は得ていない。ともに中型甕であるが、北側で出土している方がやや径・器高ともに上回っているが、意図があるものとは思われない。

### 3. 土器棺墓

P-3 Nの4段目のライナーで確認している。他の調査区と異なり、弥生時代～古墳時代の追構面が高い位置で見られる。追構面は標高24.90m前後である。甕を利用した土器棺で、胴部上半を割り、下半を身としている。特殊な形態を採る土器棺で、1個体の土器を上下に分けて使用している。胴部下半の棺身は、ほぼ垂直の正位置に据えており、胴部上半と口縁部を身の下の棺台（押さえ）としている。口縁部は逆位置に埋部を下にして据えている。胴部破片も口縁部に沿って棺身が安定するように置かれている。墓壇は、径40cmの不定円形で、30cm以上掘り下げている。棺台となっている口縁部は墓壇底に接している。

類例としては、時期は遡るが弥生時代中期後半の三田市奈カリ与遺跡東谷区2号土器棺がある。同一個体を分割していることは同じであるが、口縁部の位置が逆である。坊ヶ塚遺跡土器棺は口縁部を下にしているが、奈カリ与遺跡東谷区2号土器棺は口



第35図 土器棺墓実測図

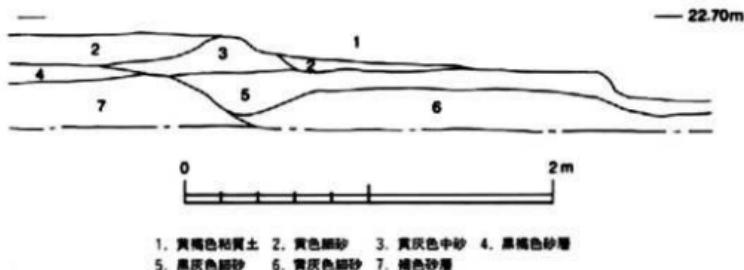
縁部を上にしている。多少異なるものの、似た例である。

周辺からは、類似した造構や同時期の他の造構は確認されなかった。ただ、調査区の北東隅で検出されていることから、北側に広がっているかも知れない。

#### 4. 水田跡

弥生～古墳時代の水田は7地点で合計11面確認している。そのうち、4面では小畦畔を検出しており水田と考えて問題ないものである。他の7面は水田土壤を認めているだけである。水田土壤は、厚いところで30cm前後であるが、大半は15～20cmである。水田土壤を認めている11面はP-1 S、P-3 S、P-4 S、P-5 S、P-2 N、P-4 N、P-8の地点で、P-1 S、P-3 S、P-5 S、P-8の4地点は2面確認している。

小畦畔を検出している水田土壤は4面で、同一地点で複数は検出していない。4面の地点はP-1 S、P-3 S、P-4 S、P-8である。小畦畔は、P-1 Sのもので幅26cm、高さ11cmを測る。P-3 Sについてだけ、小畦畔を2本確認している。不定形小区画の水田であるため、小畦



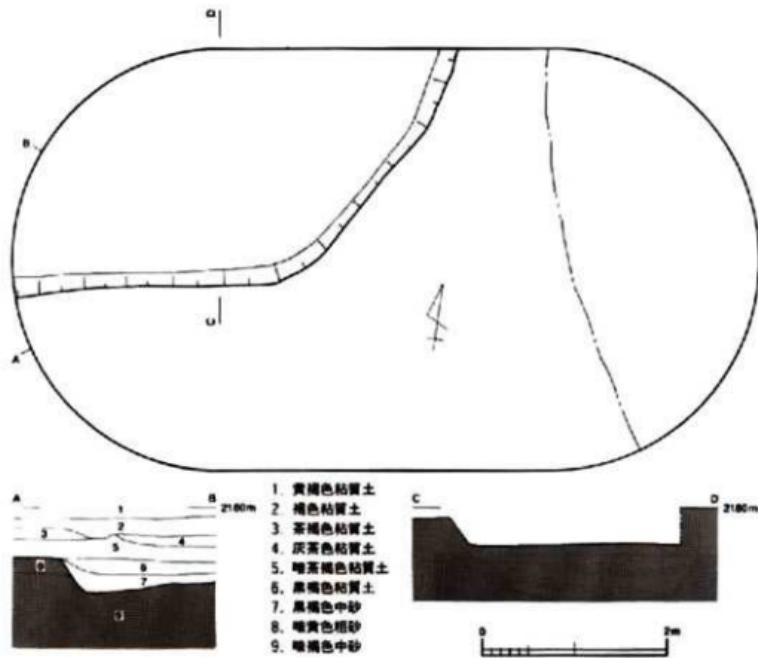
第36図 P-1S No.5 水田跡土層図

畔の隔たりに意味はないであろうが、断面での数値は26cm離れている。地形は他の造構と同じく北西から南東方向へ傾斜している。遺物は1点も出土していない。

#### 5. 弥生時代末～古墳時代の他の造構

この時期の他の造構は、P-8で落ち込みと溝をP-9で焼土塙を確認している。

P-8の落ち込みは、調査地内の北西部分で隅円の方形に落ち込んでいる。今回の調査の中で最も広い面積を対象としているが、やはり調査面積が狭いことから確実な性格を押さえることは出来なかった。調査を行った部分では東西3.9m、南北2.5mを測る。深さは0.25mとさほど深くはない。隅円方形状に落ち込んでいることから、住居跡かとも考えたが、ピットは認め



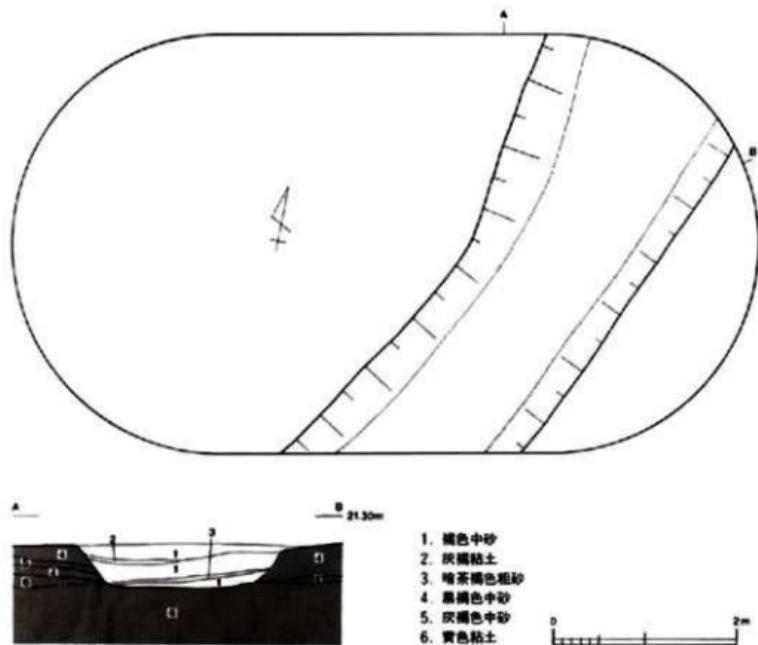
第37図 P-8 No.8 落ち込み・水田跡

られず明らかには出来なかった。出土遺物は、弥生土器の小片だけである。ただ、落ち込みの周から約20cm南側で獸骨が出土している。

同じくP-8のNo.9のところで溝を1本検出している。落ち込みの1面下の造構面から検出されている。北東から南西に向かって延びており、幅は2.0cm、深さ0.3cmを平均とする。埋土は褐色中砂を主とした自然堆積である。堆積状況からも古墳時代ではなく、弥生時代末の造構と考えられる。方形周溝島の溝の一部の可能性も想定される。ただ、住吉宮町遺跡群の他の例を参考にすると、周溝とすれば、溝の幅・深さ共に数値が大きすぎるようである。

P-9の焼土壙は、No.10の標高20.50mと比較的低い部分で検出されている。最大径65cmの不定円形の造構で、土壙上面には焼土が見られた。その下から弥生土器が出土している。深さは25cmと浅く、造構面も土壤化した層が薄いことから、長期間安定した面とは思われない。

他に、造構とは断定出来ないが、P-7のNo.9で砂堆状の高まりを確認している。高さ0.7m、底面での幅2.1mを測る。水田の大畦畔の可能性も考えられる。



第38図 P-8 No.8 滝状造構

確実に造構ではないが、自然の落ち込みが、P-2S、P-3S、P-7、P-10で確認されている。

## (2)中世の造構

明確な造構は確認されていない。P-1S、P-3S、自由通路でピットが検出されているだけである。調査面積が、柱間より狭いこともあって、造構の性格は明らかでない。

P-1Sでは、ピットと土壌を1基ずつ調査している。ピットの径が20cm余と小さいことなどから、時期は平安末～鎌倉時代の造構と思われるが、断定は出来ない。

自由通路では、上の造構面でピットを2基検出しているが、埋土が他の造構の土と異なっていることから、造構として捉えることに疑義を感じている。

今回の調査では、中世の造物は出土しているものの、明確な造構は確認されなかった。ただ、周辺の調査地点の結果から考えて造構が存在しないとは考えられない。

## V. 遺物

出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・獸骨がある。追構出土遺物は、古墳・周溝墓の溝ならびに土器棺に伴う遺物であり、他は包含層出土遺物である。そのため、追構出土遺物以外は小片のものが大半である。

### (1) 弥生土器

調査地区の半数以上の個所から出土しているが、ほとんどの土器は小片である。圓化したものは、P-3S・P-5S・P-5Nからの出土である。

追構に伴うものは、周溝1(SX01)・周溝2(SX02)の周溝墓と思われる溝からの出土遺物である。他は、違う時期の追構か包含層からの出土である。

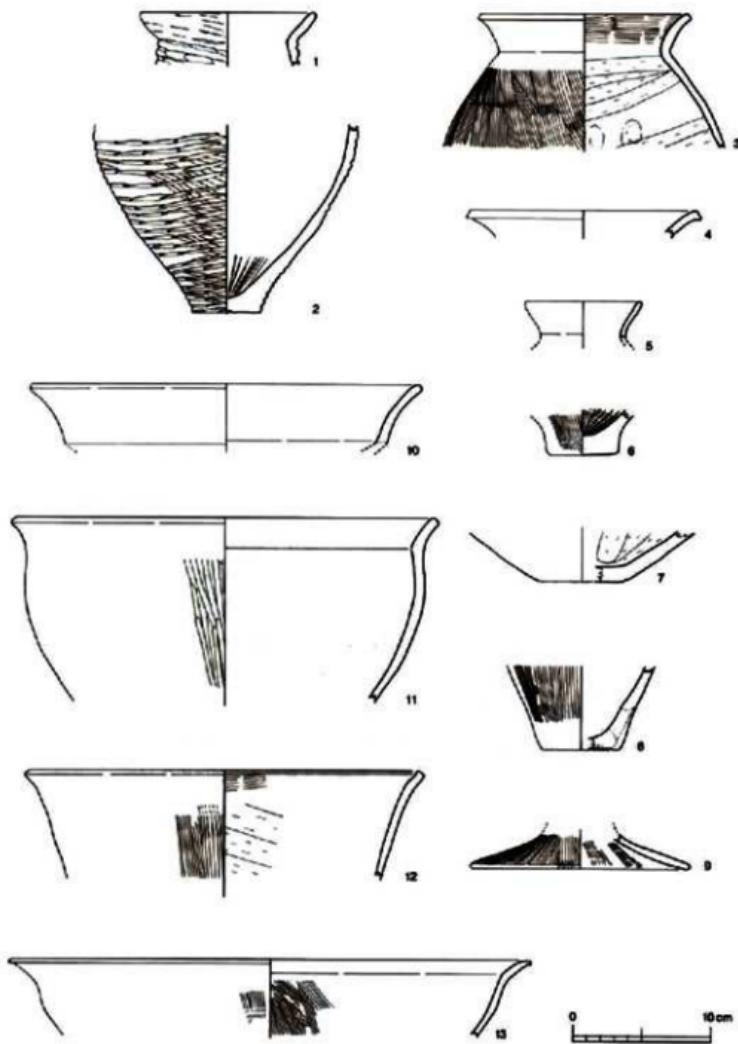
圓化したものは13点である。器種は、壺・甕・高杯・鉢である。(1)が周溝1(SX01)、(2)が周溝2(SX02)、(3)がP-9焼土壙出土土器で、他は包含層出土土器である。

#### 壺 [(1)~(4), (8)]

圓化した13点のうち5点が壺である。口縁部が3点、底部が2点である。(1)は、SX01出土遺物で、圓化したのは口縁部だけであるが、他に同一個体と思われる破片がある。磨滅もありないことから、大きく移動したものとは思われない。外面は灰褐色、内面は褐色を呈し、胎土に長石・チャートの小石粒を含んでいる。左上がりのタタキ成形ののち、口縁部を作り出している。その際の痕跡が口縁部に絞り目状に残されている。幅5mmを測る粗いタタキで、外面は調整を施していない。口縁部のみヨコナデで仕上げているが、丁寧ではない。内面は、ユビで仕上げている。口径12.4cm、残存高3.8cmを測る。

(2)は、P-6のSX02出土遺物である。甕の胴部下半で、最大腹径19.0cmから下が残っている。残存高は19.0cmあり、底径は4.8cmを測る。外面は茶褐色で内面は灰色がかった茶褐色の色調を呈している。長石・チャートなどの砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。外面は左上がりのタタキメののち、右上がりのタタキメを施して成形している。粗いタタキメを施したのち、底部を再成形している。その痕跡が外面のタタキメ以外にも内面に絞り目となって表れている。内面は板ナデかとも思われるナデで仕上げている。底面は中央部分が2~3mmと僅かに上げ底になっている。最大腹径を中央より上位に持つ壺と考えられ、追構の時期を考える上に重要な土器である。

(3)は、P-9焼土壙出土で、壺に近い形態を採る土器である。口径15.0cm、残存高9.5cmを測る。外面は、6~7本/cmのハケで整形している。内面は、ユビ成形ののちヘラケズリを行っている。口縁部はハケ整形を行ってからヨコナデで仕上げている。口縁端部は、外側に僅かに



第39圖 弥生土器實例圖

つまみ出すように肥厚している。口縁部は外湾ぎみに開いている。外面は赤褐色、内面は褐色を呈し、小石粒を含んでいる。

(4)も口縁部で、(3)に近いタイプになろうかと思われる。口径16.4cm、残存高1.9cmを測る。全体的にヨコナテが施されている。赤褐色～灰褐色をし、砂粒を含んでいる。

(8)は、底径5.6cm、残存高6.0cmを測る底部である。外面は、赤褐色でハケ整形しており、底部に近い部分のみナデで仕上げている。内面は、茶～黒褐色でヘラ状工具で成形したのち、ユビ整形・調整をしている。器肉の厚い土器である。昭和63年度調査地区（自由通路）東側包含層から出土している。

#### 壺 [(5)～(7)]

(5)は、小型丸底壺の口縁部である。P-8の包含層から出土している。胴部の破片も見られるが接合出来なかった。表面磨滅が著しく、整形技法など不明である。復原径8.2cm、残存高2.7cmを測り、茶褐色を呈している。チャート・長石・酸化鉄の小石粒を含んでいる。胴部の破片は、内外面とも6本/cmのハケ整形で、内面はナデで仕上げている。

(6)(7)は、底部である。ともに自由通路部分から出土している。(6)は底径5.2cm、残存高3.2cmを測り、石英・長石を含む。底部再成形で、内外面ともハケ整形であるが、内面のハケはくもの巣状のハケである。(7)は、大型の土器の底部で底径5.8cmを測る。内面はヘラケズリで、外面はユビ調整が行われている。

#### 高杯 [(9)～(11)]

(9)は、低脚の高杯である。口径16.0cm、残存高2.5cmを測り、胎土は少量の長石の小石粒含むが、緻密である。器表は暗赤褐色～茶褐色で、器肉は赤褐色である。内外面ともハケ整形であるが、内面はさらにユビ調整を行っている。低脚の椀形高杯の脚部であろうと思われる。

(10)は大型高杯の口縁部である。復原口径28.4cm、残存高4.3cmを測る。茶色～赤褐色に焼き上げられており、砂粒を含む。縦口縁部より上部が残っている。自由通路部分からの出土である。

#### 鉢 [(11)～(13)]

大型の鉢3点を図化している。大型であることから復原径は絶対的な数値ではない。(11)は、復原径31.2cmを測り、外面赤褐色、内面茶褐色、器肉黒褐色を呈している。最大径8mmの長石などの石粒を含むが全体的には精良な胎土である。胎土とともに内外面ともにヘラミカキで仕上げた精製品である。内外面とも丹を塗布している。口縁部はヨコナテが施されている。口縁部は、緩やかに外反している。端部は角張っている。

(12)は、直線的に外反する深い鉢の口縁部である。端部は内側につまみ上げており、ヨコナテで仕上げている。内面はユビ成形のちヘラケズリ、外面は4～5本/cmの6本単位の粗いハケ整形である。復原口径24.0cm、残存高7.8cmを測る。

(13)は、復原口径38.0cm、残存高5.5cmを測る。内外面ともハケ整形のち、口縁部のみヨコナ

テで仕上げている。弧状に外反しつつ、僅かな稜線を持って口縁部へと続いている。端部は尖りぎみに丸く納めている。

## (2) 土師器

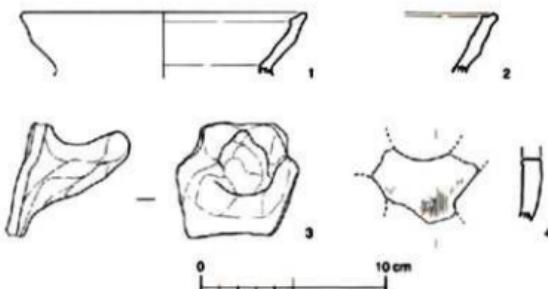
古墳時代と思われる土師器で図化したものは5点である。甕3点、瓶把手1点、形象埴輪かと思われる不明土器1点の5点である。

(1)(2)は布留式甕の口縁部の破片である。  
(2)は小片のため径を復原することは困難である。(1)は口径15.0cmを測り、口縁部口唇面に特徴的な折り返しが見られる。

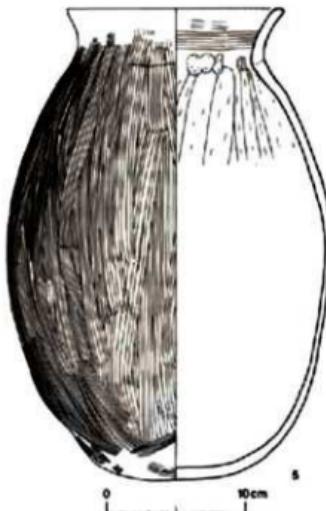
色調は赤褐色で、胎土には長石・チャートの小石粒を含んでいる。  
ヨコナナで仕上げている。

(3)は瓶の把手で、P-9からの出土である。他に把手が1点出土しており、対になるものと思われる。一般的な先細りの棒状の把手を上方に向けて体部に付加している。体部の厚さは0.8~1.2cmとさほど厚くなく、大型の甕とは思われない。把手部はすべてユビで成形している。また、P-8からも把手が出土している。

(4)は、P-9からの出土であり、上記(3)と同一層から出土している。3個所に透孔のある土器片で、透孔の種類も円形と不定形（三角形か隅円方形か？）の2種と特殊な土器である。外面は6~7本/cmの細かいハケで整形している。器肉の厚さ1cm前後の小片で、明赤褐色を呈しており、胎土は緻密で焼成も良好な精製土器である。甕の時期からS X03などや周辺の古墳や



第40図 土師器実例図(1)



第41図 土師器実例図(2)

坊ヶ塚遺跡の古墳と同時期の6世紀初頭の時期の遺物と考えられ、形象埴輪の可能性が高いものと思われる。

(5)は、P-3 N出土の土器棺として使われた土器である。胴部上半一口縁部を棺台に、胴部下半を棺身としていた姿である。出土位置（土層）の差から現在の器表の色調は全く異なっている。棺台部分はマンガンが付着して黒色となっている。接合すると長



第42図 土器成形技法

胸の姿となった。口径15.6cm、最大腹径23.4cm、器高33.5cmを測る。器高のはば中位に最大腹径を持ってきているが、底部が大きく口縁部が小さいことから視覚的には下膨れの感を受ける。底部は丸底であるが、平たい感じの接地部の多い底部である。胴部は緩やかな弧を描いた長い胴部で、内外面ともに明らかな模様を持たない頸部から外済して尖りぎみに丸く納める端部へと続いている。外面はユビ成形のちハケ整形を行っている。内面はユビ成形のちヘラケズリを行っている。胴部下半はユビ調整を施している。口縁部は成形したのち、折り曲げて作っており、内面はハケ整形をおこなっており、その後全体にヨコナデで仕上げている。外面が赤褐色～暗黄色で内面が灰褐色～暗黄色の色調を呈している。長石・チャートの小石粒を含み、焼成は良好である。器肉は底部が9mmとやや厚く、口縁部も同じくらいの厚さを持っているが、胴部は4～5mmと薄くなっている。棺身と棺台は当然ながら、焼成後に割っている。

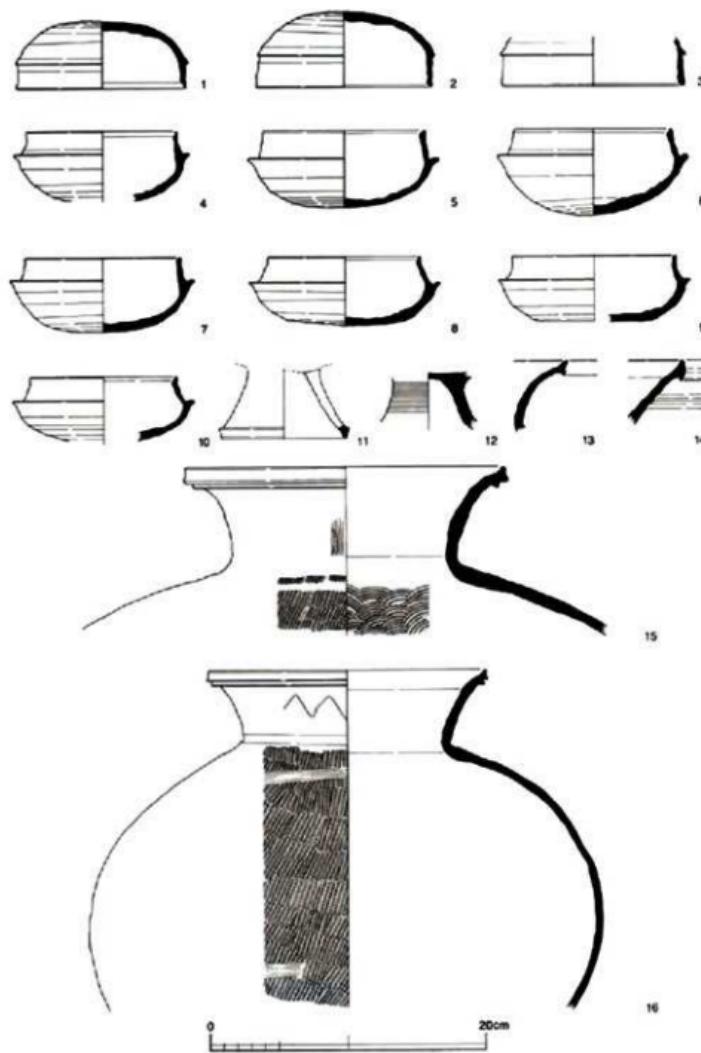
### (3) 須恵器

須恵器片は、半数以上の調査地点で出土しているが、図化出来たのは古墳（S X03・S X04）に伴う遺物がほとんどである。古墳以外の包含層からも出土しているが、破片の大きさが小さいものが多く、図化可能な土器も少数である。

杯蓋3点、杯身7点、高杯脚部2点、中型甕（壺）4点の16点を図化している。大きく見れば、同一時期であろうが、微妙な個体差は認められる。例えば、S X03出土遺物〔(1)～(7)〕は一括遺物でありながら、端部の形態が変化している。

個々の詳細は第4表の観察表に譲るが、(1)と(4)は焼成段階からセット関係にあったものと思われる。焼成期の状態や灰被りの状況が同一なことから、間違いないものと思われる。(1)(4)以外のS X03出土遺物は焼成が甘く特徴的である。特に内面灰白色を呈するものが多い。

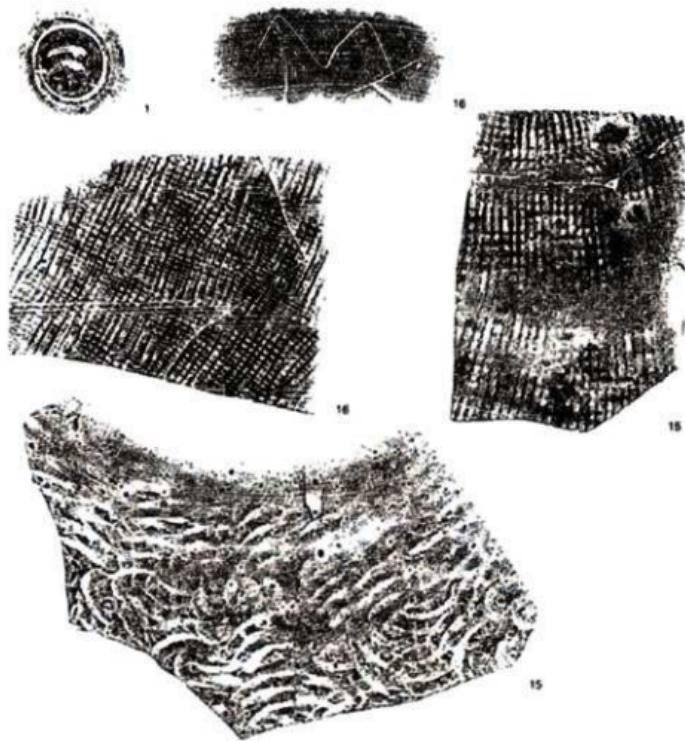
しかし模様はシャープで仕上りは精緻である。甕の破片も薄く仕上げられ丁寧なつくりである。



第43図 須恵器実測図

## 第4章 漢字彙

レイアウトNo.	出土遺物	種別	名稱	法量			形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備考
				口径	底径	高			
1	P-5N S X03	用具器	杯	12.15	4.85	天井部はやや丸味をもつ。天井部はつまみ出されている様子が窺われる。	天井部の外縁部はロクロ削り、天井部の内縁部はユビヒカリ削り。	(1)の杯身と片。	
2	P-5N S X03			n	12.55	5.45	天井部は丸味をもつ。天井部はつまみ出されている様子が窺われる。	天井部の外縁部はロクロ削り、天井部の内縁部はユビヒカリ削り。	(1)の杯身と片。
3	P-5N S X03			n	(13.0)	(3.45)	天井部と外縁部をわけた複数の段階状に比べてやや大きくなっている。外縁部はつまみ出しが明らかに現れる。	天井部の外縁部はロクロ削り、天井部の内縁部はユビヒカリ削り。	(1)の杯身と片。
4	P-5N S X03			n	10.8	(4.9)	天井部は丸味をもつ。天井部はつまみ出しが現れる。	天井部内面に立ち上がり部の結合部がみられる。底部は分厚ロクロ削り。	(1)の杯身と片。
5	P-5N S X03			n	(11.6)	5.5	天井部と外縁部にわずかに段階状に比べてやや大きくなっている。外縁部はつまみ出しが現れる。	天井部はロクロ削り。	(1)の杯身と片。
6	P-5N S X03			n	(11.2)	6.1	天井部は丸味をもつ。天井部はつまみ出しが現れる。	天井部の外縁部はロクロ削りはどちらほどにせばまき色を呈する。	外縁部はロクロ削り。
7	P-5N S X03			n	11.1	5.35	天井部はつまみ出しが現れる。	天井部はロクロ削りは分厚。	外縁部はロクロ削り。
8	P-8 No.8			n	—	—	天井部はやや丸味をもつ。外縁部はつまみ出しが現れる。	天井部はつまみ出しが現れる。	始七に砂粒を含む。
9	P-10 No.10.黑灰土			n	11.6	4.7	天井部はつまみ出しが現れる。	天井部はロクロ削り。	
10	P-9 No.10.黑灰土			n	(10.5)	(4.5)	天井部はつまみ出しが現れる。	天井部は水平にのせる。	
11	P-9 No.10.黑灰土		瓶(高杯)	瓶径 (4.95) (6.5)	瓶身 —	—	天井部はつまみ出しが現れる。	天井部はロクロ削り。	外縁にウナノ模様を施す。
12	P-8 No.8			n	—	(4.0)	天井部はつまみ出しが現れる。	天井部はロクロ削り。	外縁にカギノ模様、外縁部は有量杯の脚部分。
13	P-8 No.8		口輪部(香)	n	—	—	天井部はつまみ出しが現れる。	外縁部はロクロ削り。	外縁にカギノ模様。
14	P-8 No.8			n	—	—	天井部はつまみ出しが現れる。	外縁部は平行線を施した後、上方につまみ出しが現れる。	外縁・口輪部は平縫合で、脚部分は斜縫合。
15	自由通路 S X04		口輪部(香)	n	22.9	(12.1)	天井部はつまみ出しが現れる。	天井部は平行線を施した後、下方につまみ出しが現れる。	口輪部外縁は平行線を施した後、ナデリによる円錐形を施す。
16	自由通路 S X04			n	20.1	(22.4)	天井部はつまみ出しが現れる。	天井部は平行線を施した後、下方につまみ出しが現れる。	口輪部外縁は平行線を施した後、ナデリによる円錐形を施す。



第44図 須恵器拓影

#### (4) 中近世の遺物

中世の遺物として瓦器2点・須恵器1点、近世の遺物として陶磁器3点を図化した。

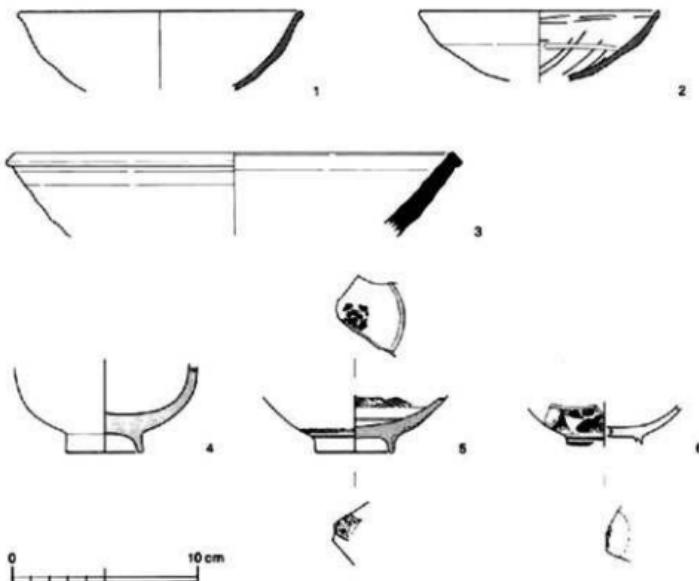
(1)(2)は瓦器類である。ともに底部を欠いている。(1)は表面磨滅しており、暗文など不明である。口縁端部は外反ぎみで丸く納めている。口径15.0cm、残存高4.2cmを測る。(2)は、底部の一部を欠いている。残存部分から見て、退化した小さな高台が付くものと思われる。口径12.8cm、残存高3.7cmを測る。表面磨減しているが、内面には直線の暗文が施されている。端部は丸く納めており、ヨコナデで仕上げている。

(3)は須恵器こね鉢の口縁部である。色調は、内面の方がやや白っぽく灰色～灰白色を呈して

いる。小石粒を含み焼成は良好である。P-6 の包含層出土である。口径23.6cm、残存高4.5cmを測る。東播系の須恵器で、魚住窯跡群38号窯に近い時期の遺物であろう。

(4)(5)(6)は陶磁器である。(4)は施釉陶器、(5)(6)は染付磁器である。(4)は京焼系陶器で、黄色の釉が施されている。高台疊付には軸の搔き取り痕がある。全体的に貫入が見られ、径1mm程度の気泡も見られる。P-10の古墳時代造構面上層の土石流から出土している。土石流の上は明治の水田跡である。(5)はP-8 の明治時代の水田面下層の洪水層内から出土している。輪高台が付き、高台径4.1cmを測る。呉須の発色は良く、内外面に施文されている。見込み部には五弁蓮華文が施されている。高台疊付には軸の搔き取り痕がある。(6)も(5)と同様碗底部である。ただ、高台部は欠損している。(5)同様P-8 の明治時代の水田面下層の洪水層内から出土している。

また、図化出来なかったが、P-8 の中世包含層から縁軸が1点出土している。口縁部高台部分も欠失している小片である。底部から棱線を持った口縁へつづく破片がありその形態から皿であると思われる。内面のみ縁軸が残っている。10世紀後半を前後する時期と考える。



第45図 瓦器・陶磁器実例図

## (5) 獣骨

P-8 の古墳時代の遺構面から獣骨が1点出土している。落ち込みの肩部付近から検出され落ち込み以外には遺構は確認されなかった。歯が1点だけ出土している。奈良国立文化財研究所松井章氏に鑑定戴き、下記のコメントを戴いた。ウマの右上顎第1前臼歯であるとの教示を得た。

### <松井 章氏のコメント>

#### 住吉宮町遺跡群の動物遺存体

右上顎、第1前臼歯である。象牙質、セメント質は土中で腐朽・消失し、エナメル質が残る。エナメル質も破損のため、正確な計測はできないが、残存部から推定できるエナメル高は60ミリ内外で、老獸に属するだろう。手元の与那国馬と比較するとほぼ同大で在来小型馬の部類に入るであろう。

古墳時代以降、ウマの歯が単独で出土することは珍しくない。それはウマの歯のなかでもエナメル質が最も堅固で腐食に強いことが大きい理由であろう。顎の骨、頭骨、四肢骨などの骨質部が存在したとしても土中で腐朽・消失してしまっていることであろう。そのため、このような断片的な資料をつなぎ合わせることによって古代、中世の家畜の歴史を語ることができるようになるだろう。こうした資料の増加を待ち望んでいる。

## VI. 住吉宮町遺跡群出土須恵器の産地推定

奈良教育大学 三辻利一

### 1) はじめに

5~6世紀時代の地方窯、およびその周辺の古墳出土須恵器の分析結果を整理した結果、この時期の須恵器の産地推定法は地元産か大阪陶邑産かという2群間判別分析法が適用できることがわかった。地元に5~6世紀代の須恵器窯が未発見の場合には、新しい時期の地元窯の須恵器をもって地元群に代替し得る。何故ならば、全国各地の窯跡出土須恵器を多数分析した結果、窯跡出土須恵器の化学特性は年代には無関係であり、窯の後背地の地質構造に関係することがわかつて来たからである。

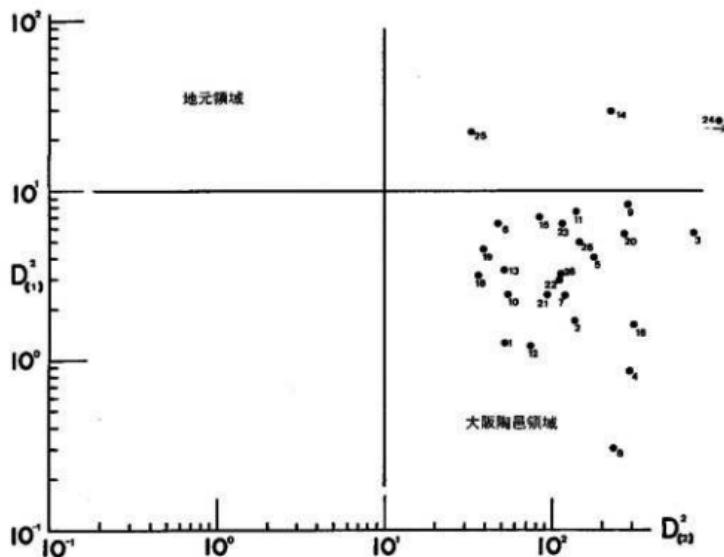
神戸市内の5~6世紀代の遺跡出土須恵器の産地推定をする場合には、一応、地元群として、神出窯跡群(9~14世紀代)の須恵器を使用した。また、最近発見された林山窯跡出土須恵器の化学特性も参考にした。このような考え方で、住吉宮町遺跡群から出土した須恵器の化学分析の結果について報告する。

### 2) 分析結果

第46図には地元、神出窯跡群の池ノ下支群の須恵器のRb、Sr分布図を示す。全支群の須恵器の蛍光X線分析は未だ行っていないので、ここでは分析されている池ノ下支群の須恵器の分析データを活用した。第46図よりわかるようにRb、Sr量は少ないのが特徴である。同様に、K、Ca量も少ない。このようにアルカリ、アルカリ土類元素の含有率が極端に少ないと素材粘土は風化が相当進んだ粘土であり、直接、花崗岩類には無関係であると考えている。全国各地には、このような化学特性をもつ窯跡出土須恵器は神出窯群以外にはあまりない。また、参考のため、少數ではあるが、林山窯出土須恵器も第46図にプロットした。明らかに、神出窯跡群の須恵器胎土とは異なることがわかる。

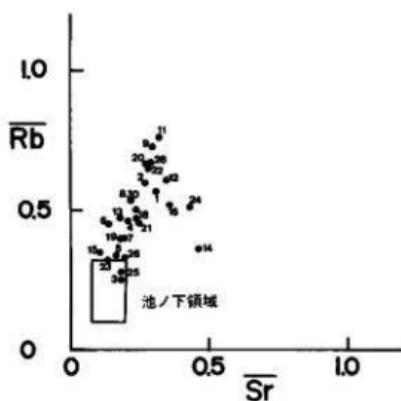
さて、2群間判別によって神出窯と大

第46図 池ノ下支群の須恵器のRb-Srの分布図

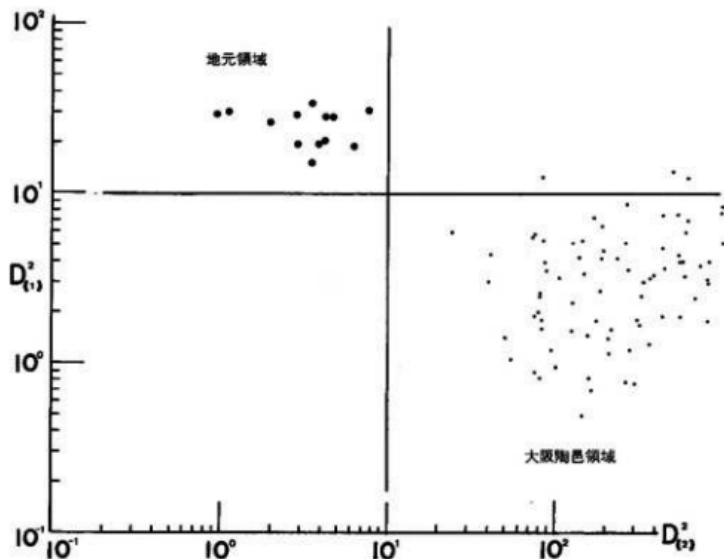


第47図 地元窯と大阪陶邑群の須恵器の相互識別

阪陶邑群の相互識別を試みた結果を第47図に示す。使用因子はK、Ca、Rb、Srであり、 $D_{(1)}$ 、 $D_{(2)}$ はそれぞれ、大阪陶邑群、神出群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗である。そして、大阪陶邑群への帰属条件は $D_{(1)} < 10$ 、 $D_{(2)} > 10$ であるのに対し、神出群への帰属条件は $D_{(1)} > 10$ 、 $D_{(2)} < 10$ である。第47図より、神出群の須恵器はすべてこの条件を満足しているが、大阪陶邑群のものは81点中の3点がこの条件を満足しない。この帰属条件は5%危険率をかけて判別する場合よりも少し厳しい条件である。この帰属条件を使って住吉宮町遺跡群から出土



第48図 住吉宮町遺跡群出土須恵器のRb-Srの分布図



第49図 住吉宮町遺跡群出土須恵器の産地推定

した須恵器の産地推定をした結果を次に説明する。

第48図には住吉宮町遺跡群出土須恵器のRb—Sr分布図を示す。ほとんどのものは地元、池ノ下領域をはずれ、大阪陶邑群に対応する領域に分布している。K, Ca, Rb, Srの4因子を使ってマハラノビスの汎距離を計算し、作成した $D_{(1)}$ — $D_{(2)}$ 分布図を第49図に示す。地元領域に分布するものは一点もなく、No14, 24, 25の3点を除く他のすべての点は大阪陶邑領域に分布し、大阪陶邑産の可能性があることを示している。No14は平安時代末と推定される須恵器であり、第48図をみても他のものからずれて分布することがわかる。また、No24, 25の2点はともに6世紀前半と推定される須恵器であるが、大阪陶邑産ではないとみられる。産地不明である。なお、6世紀後半と推定されるもので、Rb—Sr分布図上で林山窯領域に対応するものは一点もなかった。ただ、林山窯の須恵器の点数が少ないので、統計計算はしなかった。

以上の分析結果は第5表にまとめておくが、蛍光X線分析法による須恵器の産地推定法も未だ確立した訳ではなく、試運転中であるので、産地推定の結果は今一度、器形・胎土観察でも吟味してみる必要があることをことわっておく。

第5表 住吉宮町遺跡群出土須恵器の分析結果

資料No	器種	部位	出土位置	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	推定産地
1	甕	胴部	S X04周溝	6世紀初頭	0.434	0.110	1.77	0.569	0.307	大阪陶邑窯跡群
2	甕	胴部	S X04周溝	6世紀初頭	0.488	0.138	2.19	0.598	0.270	"
3	杯蓋	口縁部	S X03周溝	6世紀初頭	0.358	0.099	2.92	0.251	0.185	"
4	杯身	体部	S X03周溝	6世紀初頭	0.440	0.106	3.50	0.464	0.208	"
5	高杯	脚部	包含層(P-10)	6世紀初頭	0.337	0.049	3.54	0.341	0.173	"
6	杯蓋	天井部	包含層(P-9)	6世紀初頭	0.324	0.048	2.67	0.446	0.136	"
7	杯身	口縁部	包含層(P-9)	6世紀初頭	0.362	0.068	2.71	0.403	0.188	"
8	杯蓋	天井部	包含層(P-8)	6世紀初頭	0.451	0.108	3.71	0.495	0.235	"
9	甕	胴部	包含層(P-8)	6世紀初頭	0.603	0.168	3.22	0.725	0.297	"
10	甕	胴部	包含層(P-9)	6世紀初頭	0.399	0.088	3.01	0.535	0.220	"
11	杯蓋	天井部	包含層(P-10)	6世紀後半	0.534	0.160	2.44	0.763	0.318	"
12	甕	胴部	包含層(P-6)	6世紀後半	0.475	0.137	2.54	0.610	0.347	"
13	椀	口縁部	中世包含層(P-8)	平安時代末	0.366	0.081	1.68	0.466	0.182	"
14	椀	口縁部	中世包含層(P-6)	平安時代末	0.333	0.263	2.72	0.363	0.458	不明
15	椀	口縁部	中世包含層(P-6)	平安時代末	0.307	0.064	1.76	0.349	0.116	大阪陶邑窯跡群
16	甕	胴部	中世包含層(P-6)	平安時代末	0.486	0.175	2.21	0.523	0.358	"
18	壺	口縁部	S X03・04周溝	6世紀初頭	0.361	0.060	2.50	0.466	0.237	"
19	杯身	口縁部	S X12周溝	6世紀前半	0.324	0.058	3.04	0.399	0.187	"
20	甕	胴部	S X14周溝	6世紀初頭	0.409	0.067	1.70	0.665	0.278	"
21	鉢	胴部	S X14周溝	6世紀初頭	0.388	0.125	2.55	0.458	0.252	"
22	甕	胴部	造構面	6世紀初頭	0.504	0.072	1.82	0.645	0.275	"
23	杯蓋	口縁部	造構面	6世紀前半	0.305	0.017	1.76	0.320	0.136	"
24	杯蓋	胴部	造構面	6世紀前半	0.653	0.371	1.88	0.508	0.426	不明
25	杯身	口縁部	造構面	6世紀前半	0.179	0.068	2.30	0.284	0.186	"
26	甕	胴部	造構面	6世紀初頭	0.325	0.062	3.08	0.334	0.200	大阪陶邑窯跡群
28	甕	胴部	S X01周溝	6世紀初頭	0.518	0.081	2.10	0.669	0.290	"

(分析値は岩石標準試料 JG-1による標準化値で示す)

## VII. おわりに

昭和62・63年度に実施した新交通システムに伴う住吉宮町遺跡群の3次にわたる調査の結果（全体では7・10次調査）、小面積の調査ながら幾つかの新たな成果を挙げることが出来た。しかし、調査結果を考えるにあたっては、その前に調査を行った線路北側の第5次調査（住吉駅ビルに伴う調査）成果を参考にしている。第5次調査結果なしでは今回の調査結果を引き出せたかどうかから疑問である。来年度に公刊する第5次調査報告書を参照されたい。第5次調査結果も踏まえて、現状での若干の検討を行いおわりとしたい。

16地点の調査の結果、全地点で遺構面は確認している。そのうち、11地点で遺構が検出されている。方形周溝墓2基、古墳2基、土器棺1基、水田畦畔4ヶ所、他の遺構2ヶ所である。中世の遺構もピットは確認されているが、明瞭な遺構は確認されていない。今回の調査では、弥生時代末から古墳時代にかけての遺構が調査されたことになる。調査面積が自由通路（第10次調査）の56.5m<sup>2</sup>が最も広い面積であることから、全容を確実に知る調査は行っていない。それでも個々の成果は上がっている。

方形周溝墓は、主体部は確認されていない。また、周溝を確認しているだけで、規模・主軸・墳形などのほとんどのデーターが不足している。溝内埋土から弥生土器片が出土しているので、弥生時代末という坊ヶ塚遺跡第5次調査の方形周溝墓と同時期であることだけは理解出来る。

古墳は2基調査している。いずれも、溝内から土器が出土していることから時期が判断出来る。S X03は古墳東側の溝と思われ、古墳の形状は方形と思われる。7個の須恵器杯が出土している。第5次調査では高杯が多いことや土器群中に土師器を含んでいるという共通点があつたが、S X03は同じ特徴を有さないようである。時期は同じである。S X04も古墳東側の溝と思われる。S X04で特徴的なことは、遺物の出土状態と土壤化した層の残存状態である。前者は、周溝内の須恵器の出土状況であるが、2個体の中型甕が出土している。1個体は確実に原位置と考えられる。他の1個体も原位置の可能性を考えられる。その場合、通路として甕を置くことがあるという意見の一例と考えている。東側周溝のほぼ中央に相当するものと思われる。後者は、土壤化した面の有り方であるが、土壤化した層が古墳周溝周辺には広がっているが、墳丘内側に約3mで層がなくなっている。土壤化層が洪水によって紛失したものと思われるが、流失部分が二段築成の上段部ではないかと考えている。そうすれば、第5次調査S X11が二段築成と考えられるが、それに次ぐ二段築成の例となろう。

土器棺は、1個体の甕を分割して使用した例である。最大腹径23.4cmの中型甕で、最大腹径より上を焼成後に分割している。大型の土器を分割して使用する例は多いが、中小型の土器の例は稀少である。また、土器棺の弥生時代に属する例は多いが、古墳時代の例はやはり稀少例

である。また、土師器の1個体での例は、なおさら数少ない例であろう。

水田造構では新たな事実は確認出来なかった。第5次調査例から水田路と断定したもので柱跡を検出している。その他の造構も、ある程度の面積の調査を行えば、性格を明らかに出来たであろうと思われる。土壤化した面がある場合、面的な調査が必要であることを如実に感じた。

個々の調査結果としては、多大なものとは言えないが、市街地の調査として一つの示唆を与えてくれるものと思われる。明瞭な造構の確認は出来ず、出土遺物も稀少であることもかかわらず、面的な調査を実施すれば、造構が検出されることが明らかとなつた。今報告にかかる調査は、幸いにも直前に北側で行った第5次調査の成果を踏まえて調査に対応出来たので造構確認や土層堆積を考慮するのに効果があった。本体工事主導の調柴ではあったが、それなりの成果を挙げられたのは、第5次調査の成果によるところが大であろうと思われる。第7次調査は垂直に深掘する上に小面積という初めての調査であり、垂直に下げることから壁面保護のために断面は1日の掘削分しか観察出来ない状況であった。また、調査途中に担当者が他組織へ出向するという初めてのケースの中で後半は1人現場になったという特殊な調査となつた。幾つかの問題点を提示しつつも今後の市街地の調査の1例を示したものとも思われる。今後、市街地の小規模開発の増加が予想されている中で検討していく必要がある問題であろう。



第58図 住吉宮町遺跡群遠景

# 図 版



住吉宮町通跡群周辺空中写真



住吉宮町遺跡群遠景（北から）



住吉宮町遺跡群遠景（南から）



S X B I 周溝断面 (P - 3 S)



焼土壤 (P - 9)



土器棺墓 (P-3 N)



土器棺墓 (P-3 N)



水田小畦畔 (P - 4 S)



水田小畦畔 (P - 8)



S X 03 周溝 (P - 5 N)



S X 03 土器出土状態



S X 04 全景 (東から、自由通路)



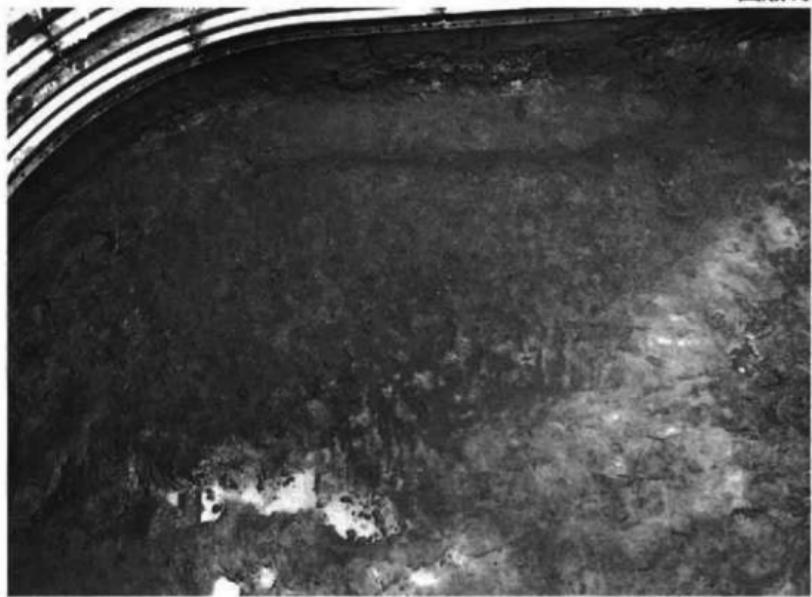
S X 04 全景 (土器取り上げ後、北東から)



S X 04 土器出土状態（自由通路）



自由通路部分土層断面



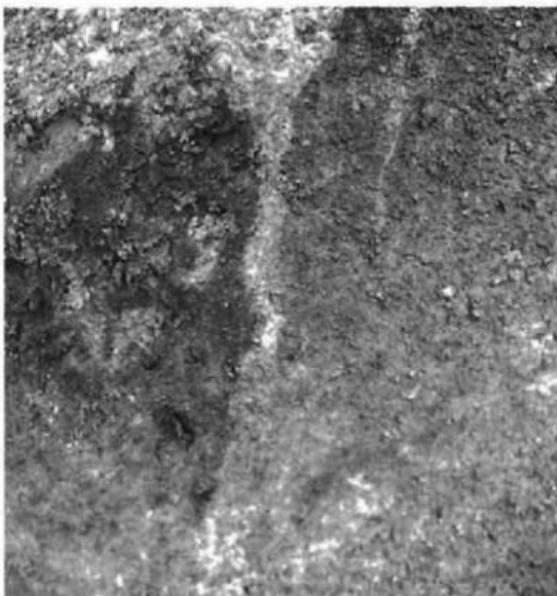
落ち込み (P-8)



落ち込み獸骨出土状態 (P-8)



旧住吉駅基盤石堆 (P-4 N)



噴砂 (P-7)



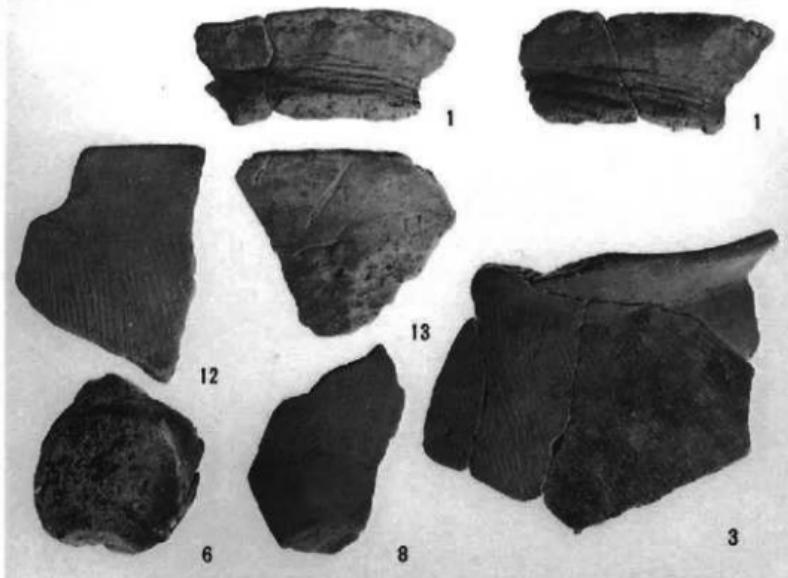
噴砂 (P-8)



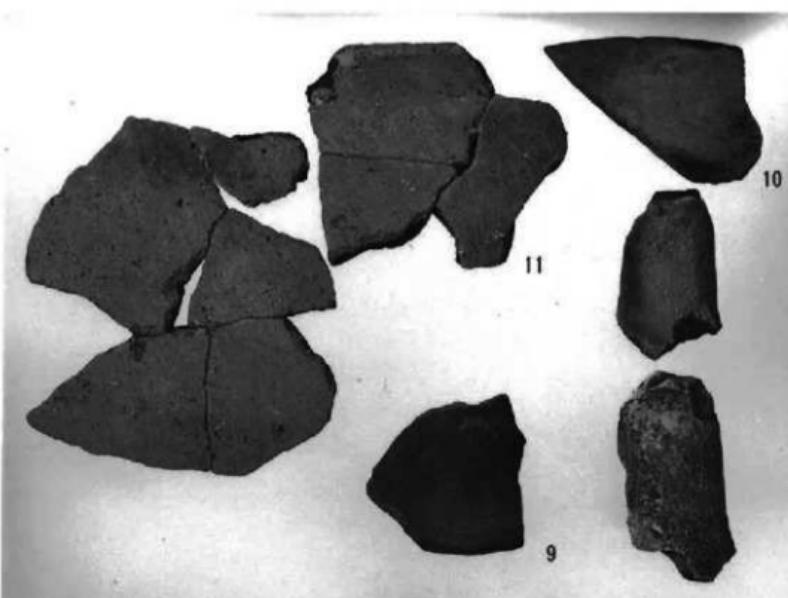
P-15 土層堆積状況



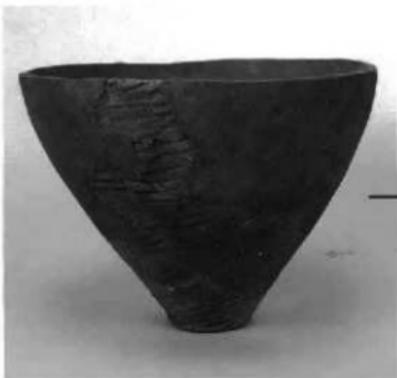
P-15 土層堆積状況



弥生土器（底・莖・体）



弥生土器（底・高杯）



2



6



5

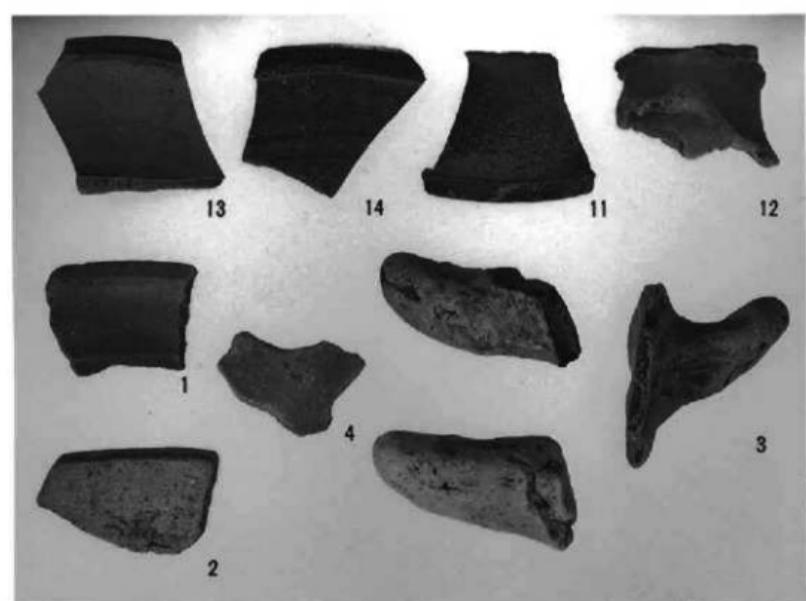
土器棺の復原

弥生土器・土師器

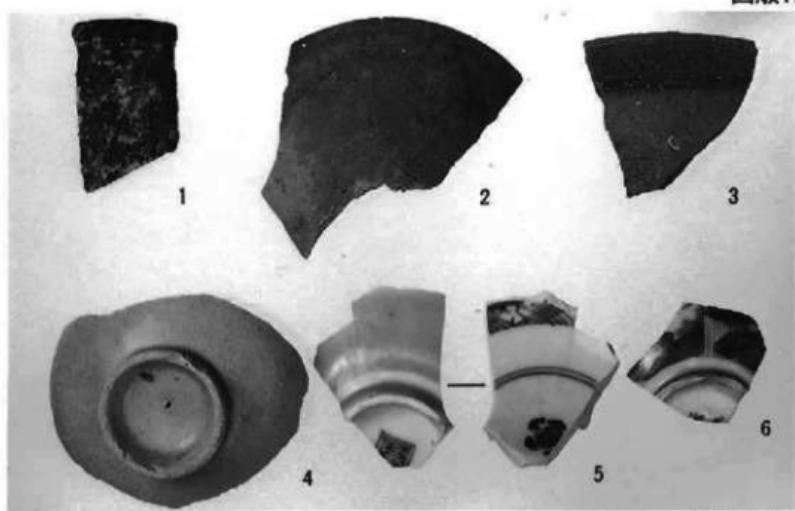




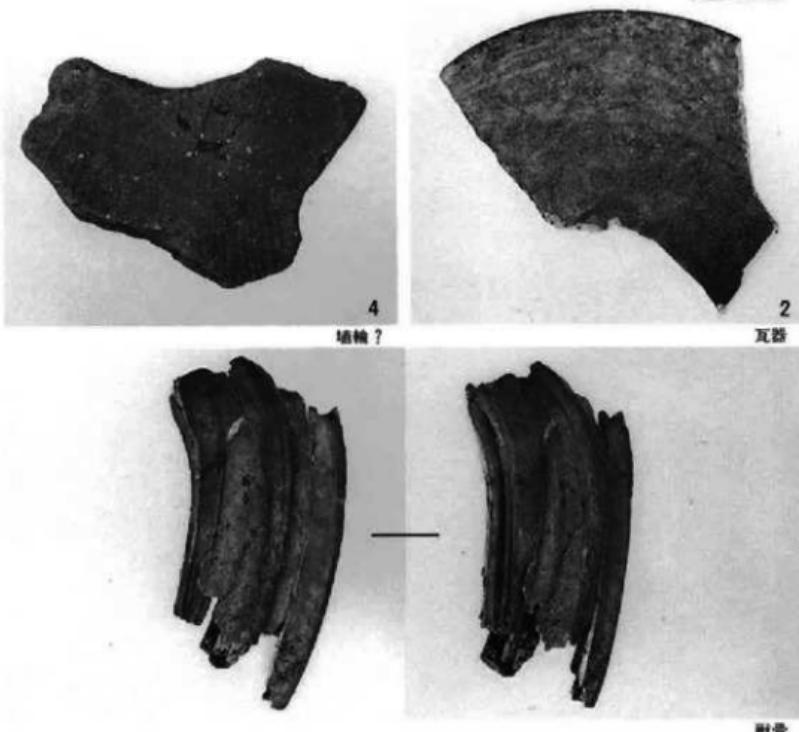
須恵器



須恵器・土器器



中近世の土器



獸骨

---

兵庫県文化財調査報告 第63冊

1989年2月21日 発行

**住吉宮町遺跡群 I**  
(坊ヶ塚遺跡)

編集 兵庫県埋蔵文化財調査事務所  
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5  
TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会  
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1  
TEL (078) 341-7711

印刷 株式会社精文舎  
〒652 神戸市兵庫区下沢通6丁目2-18  
TEL (078) 575-4729

---